

恭しき華は霞の中で何想う

音子雀

※タイトル変更しました。(前タイトル:無気力少女はバーサーカー)

なんの変哲もないリボンクラスタの少女、霞恭華。

体が弱かった(らしい)彼女はそれが崇めてかある日あえなく死んでしまう。

そんな恭華の前に現れたのは虚のような姿の不思議な存在。

連れていかれたその先は、信じ難いことにリボンの世界だった。

そして、少女には人には言うのがはばかられる趣味があった。

ツナたちと関わることで変化していく恭華、恭華と関わることで変化していくツナたち。その変化がもたらすものは一体なんだろうか。

※主人公がとんでもない人から恋されます。原作崩壊にも程があります。苦手な人はブラウザバック。

※改稿版になりました。

目次

- 1、死にました。
- 2、転生しました。
- 3、自爆しました。
- 4、検査しました。
- 5、楽しみました。
- 6、やらかしました。
- 7、だめでした。
- 8、好きでした。
- 9、知りました。
- 10、事故りました。
- 11、調べました。

12、勉強しました。

13、爆発しました。

1、死にました。

修正しました。

えーと、みなさんこんにちは。そして初めまして。

馬鹿です。

冗談です。

霞恭華^{かすみぎょうか}という者です。

生粋のリボクラです。マジです。

そして馬鹿です。うましかです。

ここ数年での悩みを聞いてもらってもいいですか。

え、ダメ？

わかりました強行します。悩み言います。

実はですね、僕の悩みというのは身近にリボクラがないことなんです。

リボクラがないんです。

その辺ほつつき歩いて某モンスターゲームのようにふらふらと求め歩けば1人や2人はいるかもしれないんですけどね、いかんせん生まれてこの方1度たりとも外に出たことがないんですよこれが。

ええ、生まれてこの方12年もの間、1度たりとも外に出たことがないんですよ。母曰く、あまりにも体が弱すぎるので外で生活するのは不可能に近い、ということでした。

もちろんそれを実感したことがあるわけではないので実質的に軟禁されているようなものです。

おかげで幼稚園はおろか学校というものにすら通ったことがないので友達なんて1人も居ないんです。

つまり、リボクラと出会えません。

まあ軟禁とはいえども外との接触が絶たれている訳では無いので、欲しいと言ったものは漫画だろうとゲームだろうとDVDだろうとなんだって買ってもらえし、最近じゃAmazonを覚えたので全く退屈はしません。

それに唯一の従姉妹だという子も時々家まで遊びに来てくれますし。

因みに漫画という漫画は殆どこの子から布教されました。

その過程でリボクラになってしまったわけだけでも。

その他にも母にも従姉妹にも話したことのないAmazon様々な趣味をお持ちでいらっしゃるんですけども、まあそれは後ほど。

あ、そうそう。

学校にも行かないで義務教育はどうしたんだって思いますでしょう？

全くもって問題ないです。

近所の学校は事情を知っていて一応籍はあるらしいですし、家庭教師さんとかちゃんと勉強していれば出席扱いにしてくれているそうです。

家庭教師って言うってもリボーンじゃないですよ？

至って普通のお姉さんです。

6年もお世話になっていたので本当のお姉ちゃんみたいな人です。

……だいぶ話が逸れましたね。

結論から言いますと、転機を待っているのです。

退屈はしなくとも飽きはやってくるのです。

いつか外の世界へ飛び出してこの家ではないどこかで、少々過激な世界だって構わないから遠く離れた場所で生きてみたいのです。

ずっと、ずっと遠くへ。

「ま、無理だってことは充分承知してるんだけどね」

B L E A C H の D V D を見ながらぼんやりと呟く。

なんとなく気になったんだけど、もしも人が死んだらその魂が行き着く先は一体どこなのだろうか。

B L E A C H のように魂魄となり尸魂界に行くのか、それともリボーンのように六道輪廻のどこかに転生することになるのか、将又はたまたそのどれでもないのか。

個人的には“無”でなければなんだっていい。

もし魂魄になるのなら虚から死神から逃げ回りながら自らが虚になってできればメノスになってあわよくば破面にでもなってやりたい。

もし六道輪廻に転生するというのは是非とも6つ全てを廻りあわよくばその過程で鬼灯さんとか白澤さんに会ってしまいたい。

という話を従姉妹にしてみたところ全力でドン引きされた上に思考が歪んでいると言われた。

あれはなかなか心に刺さったね。

「それ以前に死にたくないというのが本音なわけだけでも、それはそれ、これはこれ。さて、BLEACH 5週目の巡回も終わったことだし次はハガレンの13週目にでも突入しようかな」

よっこらせ。

立ち上がった途端、酷い立ちくらみに襲われた。

一瞬で目の前が真っ暗になって右も左も上も下も分からなくなる。

今までにも何度か立ちくらみは経験したことあるけど、今回ののはやばいと直感で

思った。

「なにか、つかまるもの……」

「ただいま」

夕方頃に帰宅すると家の電気はどこもついていなくて全体的に薄暗かった。
あの子がいるはずなのだけど、どうして点けていないんだろう？

「恭華、いるの？ 寝てるの？」

リビングにはいない。

ご飯の時とお風呂の時以外は基本的に部屋にこもっているのが我が娘だ。
こうして家の電気がどこもついていないのはよくあることだった。

だけど、部屋の電気ですら消えていた。

なんだか嫌な予感がしながら恭華の部屋のドアをノックする。
返事はない。

「恭華？ 入るわよ」

ドアを開ける。

やっぱり電気はついていなくて朝からつけっぱなしであっただろうテレビの画面だけがやけに明るい。

唯一の光源のまぶしさに目を細めながら部屋の電気をつけた。

そこには、倒れて動かない恭華の姿があった。

「恭華!? しっかりしなさい!」

慌てて駆け寄って抱き上げるも、その体は硬直していて、とても重くて、そしてとても冷たかった。

「嘘、よね？ ね、恭華、起きなさい、一緒に晩ご飯作ろうって朝に約束したわよね……？ 恭華、恭華……起きなさいよ恭華……恭華っ!!」

なんだか不思議な気分だ。

女手一つで文句もないと言わないで一人娘を育ててきた超クールビューティだと思っていたお母さんが、こんなにも取り乱してこんなにも泣き叫んでいる。

こんなの、一生に一度見られるかどうかの超レア光景だ。

目の前に広がるのは、倒れている自分の体と抱きかかえて泣き続けているお母さんの姿。

客観的に自分の姿を見ているせいかな、ここにいる自分が自分じゃないように感じる。

というか、これは一体何が起こってるの？

お母さんを慰めようと伸ばした手は何を触ることもなくすり抜けてしまう。

視線を落とせば、胸許につけられた千切られた鎖。

これは、死んだな。

「あっはは、なんてわかりやすいんだよこの姿。なあんだ、死んだんだ」

そっか、なるほどね。

長年の疑問は結論から言って、BLEACHの世界が正しかったみたいだ。
つまりこの体は魂魄そのものってわけだ。

じゃあここにいる理由なんてもうどこにもない。

地縛霊になる気なんてさらさらないし、お母さんとのお別れはすごく寂しいけど、だからって死神や虚から逃げないわけには行かないんだ。

さようなら、お母さん。

最後の最後に、ちゃんと愛されてたんだってわかって嬉しかったよ。

ありがとも大好きも言えなくてごめんね。

「で、あんたはこれからどうするの？」

「どうもこうも、逃げてやるって決めて……えっ？」

誰か今話しかけました？

というかどこから声が聞こえました？

キヨロキヨロ見渡してみてもそれらしき姿はどこにもない。

「どこを見てんのさ。上を見なさいよ」

「上？……ええー」

「ええー、とか言わないの」

言われた通りに上を見たそこにいたのは、虚っぽい何か。

なんでそんな言い方なのかというのと、虚のような仮面をつけてはいるんだけど、なんていうか妖精っぽい何かがある。

虚とティンクを足して2で割った？

いや違うな、虚と六花を足して2で割った？

うん、これだ。

「あなたは誰？ 虚？ 魂魄を食べに来たの？」

「違うわよBLEACHオタク。そんなことより、あんたって霞恭華で合ってる？」

「

え、うん」

「オッケー、じゃあ私についてきて」

「いいところに連れてってくれるの？ だが断る！」

「何その流れ!？」

「知らない人にはついて行かないって今どきの小学生でも知ってるよ」

「死人が言うな」

うーん、初めて外に出たのはいいけど早々に変な人とエンカウントするとは思わなかったよ。

お母さんによく、外には変な人がいっぱいいて危ないんだよ、とは言われてきたけど、正解だったよね。

「とにかく、来てもらわないと困るの。このままBLEACHみたいに死神が来るかもって誤解されるのもゴメンだし、それにあんたを指定の場所まで連れていかないと私が怒られるんだから」

「誤解？ 胸の鎖はBLEACH関係ないの？」

「その鎖のせいで勘違いする死人多くてウザいけど、関係ない。死神は魂葬にこないし虚は喰いにこないしあんだが虚になる可能性もこれっぽっちもない。あるのは魂が腐って地縛霊か悪霊になる程度」

なーんだ、つまんないの。

「だけど、そしたらどこに行くの？」

「来ればわかる」

「え、あ、ちょ、首根っこは勘弁……!!」

そして訳も分からないままにその虚もどきに拉致されました。

F i n

「勝手に終わらせるなあああ!!」

2、転生しました。

ハッと目を覚ますと僕は見知らぬベッドでぬくぬくと過ごしていた。

そして、「目を覚ます」という行為のおかげで今まで意識がない状態にあったことを知った。

胸にあったはずの千切れた鎖はなくなっていた。

「おはよ」

「わっ虚もどき！」

「……一応ネロって名前があるんだけど」

「え、黒？」

「一瞬で日本語訳にされた!？」

そりゃあだって、ネロがイタリア語で黒だってことは周知の事実ですし。

ジッリョネロが黒百合って意味だってことはもはや常識ですし。

「まあそれはいいや。ねえ、ここはどこ？」

「ここはあんたの家よ。あんな昔のことは覚えてないだろうけど、あんたは転生し

たのよ」

「どこの世界に？」

「二次元転生が前提なのね……」

二次元中毒者を舐めてはいけない。

「……はい。そんなわけでリボーンの世界です」

「……ほう」

「あれ、反応薄くない!？」

別に薄くはないと思うよ。

だってリボクラだもの、転生は何度夢に見たかわからないさ。

でもね、なんていうかね、色々と段階をすっ飛ばしすぎてゐる気がしてなんのですよ。

それに転生したら何したいってことも考えないままに転生しちゃったからねえ。

「そんなあんたに朗報です。明日から並盛中学校に通ってもらいます」

「ゑ？」

「前世はともかくとして義務教育はちゃんと受けてもらうよ。ちなみに時期として

はGWが終わったばかり。中学一年生が腑抜け始める頃だね」

いや、あの、そういう問題ではなくてですね。

抑々、家の外の人を従姉妹と先生以外に知らない僕が他人と話せるだけでも？

無理無理、絶対に無理。

下手したらどこぞの誰かさんみたいに「静寂と孤独」を愛しかねないから本当に無理。

「「静寂と孤独」

「復唱するな」

「それはそうと、一応あんたの前世を知ってるし私と出会った時の反応を知ってる身から言わせてもらうと、あんたは他人とやっていける子だよ。大丈夫だからちゃんと自信持って」

「わ、わかった。とりあえず遠巻きでツナとか山本とか見てニヤニヤしてることにする」

「それ不審者……」

翌日。

ネロが用意してくれた並中の制服を身にまとして僕は若干というかかなりビビりながら学校に向かった。

楽しみだったのか緊張していたのか或いは両方か、昨夜は全くと言っていいほどに眠れなかった。

これもまたネロが用意してくれた並盛町の地図を持ったままふらふらと働かない頭で町を徘徊しているのが現状である。

初めて感じる外の空気に戸惑い、初めて歩く並盛の町並みに戸惑いながら、30分というとても時間をかけてようやく学校にたどり着いた。

並盛中学校とは漫画やアニメの中で何度も目にしてきたけど、やっぱり本物は違う。

何かって、何かが。

僕に語彙力を求めてはいけない。

もちろん校門前には風紀の腕章をつけた学ランリーゼント集団がわらわらして
る。

なんで風紀委員はいくら群れても咬み殺されないのか甚だ疑問である。

そろっと彼らの脇をすり抜けて、僕は職員室に向かって一直線に急いだ。

「し、失礼します。えっと、今日から転入することになってる霞です……」

とりあえず言っときや何とかなる、とネロに入れ知恵されたセリフを言ってみる。
というか完全にノリと勢いだけで職員室まで来ちゃったけど、これで合ってたの
かなあ……。

しかもなんでか知らないけどみんな見て見ぬ振りというか、そんな気がするとい
うか、なんか変な空気。

思わず入り口付近で縮こまった。

「ああ、もしかして霞恭華さん？」

「え、あ、はい」

そんな僕にようやく声をかけたのは、ブラウスにズボン姿の女の先生。

「せっかく来てくれたのにごめんね、担任の先生、ちょうど部活の朝練の時間ではないのよ。ここで待っててもいいけど、教室に行っちゃっても大丈夫よ」

「教室……?」

「ああ、そっか、そうよね。転入初日なのにクラスもまだ聞いてないんだっけ。それじゃ案内してあげるわ。私は1・B担任の三枝よ、よろしくね」

「よろしく願います、三枝先生」

明るい茶髪をボブカットにした三枝先生はすごく元気っ子って感じの人だ。

担当科目は数学だと予想してみる。

理由は適当。

そんなわけで三枝先生のおかげで無事に1・Aの教室に到着しました。

わーい1・Aだー。

ツナたちを見ながらニヤニヤするぞー。

あ、京子ちゃんを見ながらニヤニヤするのもありかな?

イヤイヤ、そんなことをしたら十中八九花ちゃんから白い目で見られることにな

る。

やめておこう、よしよし。

「さすがに席はわからないからここまでの案内になっちゃうけど大丈夫かしら？
この時期の転入って馴染むのが大変かもしれないけど、頑張ってね」

「はい、ありがとうございました」

三枝先生が隣の教室に入っていくのを見届けてから、僕は改めて自分のクラスの教室を見た。

早くも遅くもない時間帯、中にはそれなりの人数がおしゃべりに興じている。

時折こっちに向けられる好奇の視線がすごく怖いものを感じる。

なんだか息苦しくなる。

教室に入る1歩を踏み出す勇気が出てこない。

無意識のうちに、思わず逃げるように2、3歩ほど後退した。

その時、ちょうど後ろから来た誰かにぶつかってしまった。

もとより非力な僕はその衝撃だけで盛大に倒れることになった。

「ご、ごめん！ 大丈夫!？」

床とのキスをかろうじて腕で防いだ僕の目の前に手が差し出された。

声からして男の子だというのがわかる。

人生で一度も会話をしたことのない、男の子。

どうするか一瞬迷って、その手を借りずに1人で起き上がることにした。

埃のついてしまった新品のスカートを軽く払ってから相手に深々と頭を下げた。

「あの、ごめんなさい」

ぶつかってしまった恥ずかしさと転んでしまった恥ずかしさから顔を上げることができず、相手の顔をろくに確認もしないままに教室の前から立ち去った。

とにかく今はこの場から逃げ出したかった。

行くあてもないというのに、ただ来た道を引き返していった。

「今の人、誰なんだろう……」

俺は、今しがたぶつかってしまった人が向かった方をぼんやりと見つめていた。腰よりも下へ伸ばされた長い黒髪、ワンポイントのような赤い眼鏡。そして何より浮世離れした存在感。

顔と声は一瞬すぎてあまり記憶には残らなかった。

あんな生徒、うちの学校にいたっけ……？

「おいダメツナ、今の奴って知り合いか？」

「えっ。いや、全然知らないけど」

教室の窓からひょっこり顔を出して声をかけてきたクラスメイトにぶっちゃけビびった。

「あの人って誰？」

「さーな。ただうちのクラスの前でずっと突っ立ってるもんだから誰だろうなって話してたんだよ」

「そ、そうなんだ」

誰も知らない人が俺らのクラスの教室前にいたってこと？

てつきり俺がクラスの人のこと覚えきれてないのかと思って焦ったよ。

まあ、覚えきれてないけど。

「けどさ、昨日だか先生が言ってたこと覚えてるか？」

「何か言ってたっけ？」

「ほら、近々うちのクラスに転校生がどーのこーのって」

「ああ……」

言われてみればそんな話を聞かされたような気がする。

どうせ俺には関係ないなって思って全然聞いてなかったや。

「じゃあ、今の人がそうなのかな？」

「かもなー」

雰囲気は美人だったよなー、なんてニヤついてからクラスメイトはまた教室の中に引っ込んでいった。

そう言えばさっきの人、すごく体調が悪そうに見えたんだけど、大丈夫かな……。思い出しながら気がかりになってまた廊下の方を向くと、ちょうどうちの担任とさっきの人が一緒に歩いてくるのが見えた。

「何やってんだ沢田、さっさと教室に入らないと遅刻になるぞ」

未だに鞆を持ったまま教室前に突っ立っている俺を見て先生はからかうようにそう言ってきた。

教室の時計を見ればもう朝礼の時間だ。

んげ、もうこんな時間だったの!?

「前に話してたと思うけど、今日からこのクラスの人数が増える」

全員が席に着くのを確認してから先生は説明を始めた。

そして、さっきの人が教室に入ってきた。

「もう話した奴もいるかもしれないけど、ちゃんと紹介しておくな。転校してきた

霞恭華だ」

先生が黒板に大きく『霞恭華』と書く。

霞さんはやっぱり俯いたままで顔は見れそうにない。

それでもあのクラスメイトが言っていたように雰囲気美人だなんて思った。というよりも、最初の印象通りに浮世離れしてると思った。

「かすみ、きょうか……です……。い、いちねん、よろしく、お、おねがい、しま

す」

消え入りそうなその声は、それでもはっきりと聞き取ることが出来た。

女の子らしい、高くて澄んだ声だった。

ふとその時、ようやく霞さんが顔を上げた。

黒い髪と黒い瞳、困ったように下がった眉と今にも泣き出しそうな目。

守ってあげたい。

真っ先にそんな考えが頭に浮かんだ。

ダメツナと呼ばれる俺がそう思うのは筋違いかもしれないけど、恐らくはクラス
の男子全員が同じことを思っているはずだ。

というかみんなそんな顔をしてる。

別に京子ちゃんみたいにすごく可愛いとか、黒川みたいに整ってるとか、そういう訳では無いんだけど、不思議とそう思わされた。

なんてことを考えてるうちに担任の先生が顧問をやってる部活に勧誘して即答で断られるという光景が展開していた。

自己紹介の時と打って変わってハッキリと対応していたから、霞さんは人見知り

なのかもしれない。

そうして霞さんは自分の席へと着いた。

「霞か？」

廊下を歩く僕のことを呼び止めたのは、坊主っぽい頭の先生だった。

ぽいって言うのは、多分坊主頭なんだろうけど中途半端に髪が伸びているせいだ。

「三枝先生と先に行っただけ聞いてただけだ」

「え、あの……」

「ああすまん、1・A担任の赤津だ」

1・A担任？

じゃあこの人がさっき朝練でいなかったっていう僕の担任の先生なんだ。

「えっと、教室は覚えたので校内を見ようと……」

嘘です逃げてきました。

教室に入る勇気がなさすぎてガッツリ逃げてきました。

「そっかー。でも朝礼の時間だから遅刻になっちゃうぞ？」

「あ、はい、すみません」

結局僕は赤津先生と一緒に再び教室に向かうことになってしまった。

途中でまだ廊下にいる生徒に早く中に入るように注意してから、赤津先生は僕を廊下に待たせて教室に入っていた。

「前に話してたと思うけど、今日からこのクラスの人数が増える」
中にいた先生に手招きされる。

正直、入りたくなかった。

またあの好奇の目を向けられると思うと怖くて仕方がなかった。

だけど人を持たせるのは良くないことだと母によく言われていたことを思い出して、勇気を振り絞って歩を進めた。

刹那、空気が変わるのがはっきりと感じ取れた。

全員の目が僕に向けられているのが見なくてもわかる。

人生で一度たりともこんな大勢の視線を受けたことはない。

それどころかこんな大勢がいる場所に立ったことすらない。

あまりの苦しさに心臓を吐き出してしまいそうだ。

「かすみ、きょうか……です……。い、いちねん、よろしく、お、おねがい、します」

なんとか絞り出した声はほとんど消えていて、たぶんほとんどの人のもとに届いていないだろう。

もう泣きそうだ。

「霞、転校早々だがうちの部活に入らないか？ 吹奏楽はいいぞ」

「あ、結構です」

「即答か」

先生とのやり取りでほんの少しだけ空気が和らいだけど、泣きそうなのは変わらない。

それどころかさつきよりも見られている気がしてならない。

帰りたくて仕方がない。

「ああそうだ、霞の席はそこな」

先生が示した先には不自然に空いた席があった。

言われなければ誰かが欠席したのだろうという認識しか持たないような空席。

入学時から空いていたのか、それとも僕の転入に合わせて空けられたのか。

どちらにせよものすごく微妙な位置だ。

先生に一礼をしてから席に向かう。

椅子に座った時、ずっと立っていたということもあつてか、何となくほっと一息

つけた気がした。

ふと、コンコン、と僕の机が軽くノックされた。

それは隣の席の人からで、どうかしたのだろうかと何気なくそちらに目を向けた。

「私、笹川京子っていうの。よろしくね！」

そして、僕の涙は一瞬で引っ込んだ。

3、自爆しました。

今日の時間割は、数学・国語・理科Ⅱ・社会・英語そして体育と、なんともスタンダードなものだ。

……うん、一般的にいうスタンダードなものはず。

正直な話、数学は脳みそが算数でお手上げ、国語は漫画読んでりやなんとかなる精神、理科社会は知ったこっちゃない、英語はなんとかなる、体育（目逸らし）である。

え、家庭教師はどうしたのかって？

ゆるゆるお喋りを楽しんでました！（ダブルピース）

……やったよ、やりましたよ、ちゃんと授業してましたよ。

どうせ僕の頭が残念なんですよ！

＊数学＊

担当は予想通り、三枝先生だった。

ちなみに教科書を読んでみてもちんぷんかんぷんである。

「それじゃあ霞さん、この問題を解いてみて」

「んー…… $2+3\times 4$ は……10！」

「その数字と自信はどこから……。答えは14です」

「ひょえっ」

＊国語＊

えっ赤津先生って国語の担当なの!?

吹奏楽の顧問なのに国語なの!?

教科書ちらっ。

はっ、この漢字、漫画で見たことある!（進○ゼミナノリ）

「1人1行音読なー」

「おじいさん、は……や、ま? あっ山! へ、しばらく、に、おばあさんはー川、へ、えっとー、せんたく! しに、いーきました!」

『（なんで読み終わったあとにあんなにドヤ顔なんだろう……）』

＊理科Ⅱ＊

さてさてどうしたものか。

なんか違う教室に移動したと思ったらお花がいっぱいあるぞ。

ルーペとはなんぞや。

おしべとめしべとはなんぞや。

「ふおっ！ おつきくみえる！ すっごい！」

「ルーペを目に近づけて持って、花を近づけたり遠ざけたりするんだよ」

「はっ!? 手が真っ黄色に!? へっくち」

「あー、花粉触ったのね。洗ってき——って霞！ 舐めちゃダメよ！」

「霞さん!？」

＊社会＊

鬼門その2のお時間がやってまいりました。

いやあ、ちゃんとした地図なんて初めて見ましたよ。

「うーみーはーひろいーなーおおきーいーなー」

「どうしたの？」

「地図見てたら思い出したの。青くて綺麗って本当？」

「行ったことない？」

「うん」

「それじゃあ海開きしたら一緒に行こうね！」

「うん！」

「こらそこ！ 無駄話をしない！」

「ごめんなさい」

＊昼＊

お昼だーっ！

給食、きゅうしょ……ん？

あれそう言えば、並中ってお弁当じゃなかったっけ？

あーっ！

持ってくるの忘れたーっ！

「霞さん、一緒にお昼食べよう？」

「ごめんなさい……お弁当……ない……」

今の僕はさぞかし滑稽にさめざめと泣いているだろう。

なんだよネロの奴、一言くらい教えてくれればよかったのに……。

学校初日からお昼抜きなんてあんまりだあ……。

「元気出して。よかったら私の分けてあげるから。ね、花？」

「京子がいいなら構わないけど……」

「笹川さん、黒川さん……ふええ、ありがとうございます……」

奇跡的に昼抜きは回避した。

優しすぎかなこの2人、天使かな。

あ、天使か。

「朝は聞いている暇なかったんだけどさ、霞ってどこから来たの？ なーんか全体的に変な奴って感じなんだけど」

「ちょっと花、失礼だよ」

「えっと、その、実は、学校って人生初でして……さっぱりなもので」

「えっ!？」

「それって小学校も行っていないってこと？ 義務教育はどうしたのよ」

「うーんとね、家庭教師のお姉さんに教わってたよ。ほとんどおしゃべりだったけど」

「ていうか何で行かなかったわけ」

「大変な病気だったの？」

「んー……どうなんだろう。とにかく外はダメって言われてて家から出たことがないんだよね」

「なにそれ！ 閉じ込められてたってこと!？」

「そうなるのかなあ……よくわかんないや」

「学校のことで何かわからないことがあったらなんでも聞いてね」

やっぱ天使だこの人。

ツナがベタ惚れするのもわかる気がするなあ。

僕も好きになっちゃいそう。

あ、百合をする気は全くないからね。

遠くでニヤニヤの予定が近くでニヤニヤに変わるだけだから。

え、不審者？ 知ってる。

でも、いくら京子ちゃんたちが天使でも甘えてばかりはいられない。

午後は迷惑をかけないようにしなきゃ。

＊英語＊

「僕これは知ってるよ。アルファベータでしょ」

「……アルファベットの間違いだと信じたいわね」

あれ、またなんかやらかしたかな？

花ちゃんからの視線がとても痛いよ。

＊体育＊

さてさて、本日最難関の授業がやってきましたよ。

一応軟禁の理由は体が弱いってことだからね、こういう支障が出るかもわからんもので。

でもやっぱりやらない訳にはいかないでしょう。

だってなんだかんだで一番楽しみだったんだから！

「ウォーミングアップだ。グラウンド一周走ってこい」

因みに先生は髪が2つ縛りでメガネに赤ジャージという風貌。

……ヤンクミかな？

そもそも走ったことすらない僕はとりあえず転ばない程度に足を運ぶ。

けどそれがあまりにも遅かったのか、京子ちゃんと花ちゃんが隣を同じペースで走っていた。

「霞さん大丈夫？」

「え、あの、わざわざ僕に合わせなくても……」

「ん、大丈夫そうね。それじゃあ京子、先に行きましょう」

「う、うん。無理しないでね？」

「行つてらっしゃい」

これではダメだ、また2人に迷惑をかけている。

もっとしっかりしないと。

走るペースを少し上げてなんとか2人に追いつこうと頑張る。

「ぜえ……はあ……」

あれ、ヤバイかも。

京子ちゃんが心配してくれてる以上に、僕が思っている以上に、意外とヤバイかも。

ほんの数メートル走っただけなのに息苦しい。

くらくら、する……。

どさっ

「霞さん!？」

「言わんこっちゃない」

次に僕が目を覚ましたのは保健室のベッドの上だった。

京子ちゃんと花ちゃんはもちろん、何故かツナまで様子を見に来てくれていた。
え、ちょっと待って、なんでツナ!?

現時点においてツナとの接触とか全く無くないですか!?

り、リボン来てないよね？

来てないんだよね？

よし、セフセフ。

いやいや、来てないのに京子ちゃんの近くにツナがいるってどーゆー状況!?

ああ、でもまた迷惑かけちゃった。

「笹川さん、ごめんなさい」

「謝らなくても大丈夫だよ」

「心配かけたことに対してだったらここにいる全員に言いなさいよ。なんでか知らないけど沢田まで来ちゃったんだから」

「うー……黒川さんと沢田くん？ も、ごめんなさい」

「今朝ぶつかった時も体調悪かったみたいだけど、大丈夫？」

「えっ？」

今朝ぶつかった？

ぶつかった？

今朝？

「あっ、あの時にぶつかったのが沢田くん……？ ご、ごめんなさい！」

「いやっ、俺は大丈夫だから！」

まさかそんなところで接点を作っていたなんて、お天道様もびっくりだよ。怖がってないでちゃんと確認していたらツナだってわかっただろうに。

まずはこの臆病な性格をどうにかしないと。

「霞、調子はどうだ？」

不意に保健室に入ってきたのは、あのヤンクミさながらの体育の先生だった。

「びっくりしたぞ、あの距離を走って倒れた生徒を見たのは初めてだからな」

「人生で最長の走行距離です」

「マジかよ」

マジです。

「悪いこと言わないから、明日病院に行ってこい。赤津にはアタシから言っとくからさ。親御さんは家にいるか？」

「あ、えっと……親はいない……というか、一人暮らし、です……」

『え!?!』

ああ、そっか。

普通に考えたら、やっと親の許可がおりたから学校に来れるようになった、だと思ふよね。

本当は僕が死んでなんやかんやあつて転生したもんで一人暮らししてネロのおかげで学校に通えるようになったわけだけど。

こんな話をしたら頭を打ったかもしくはやばい子だと思われるのがオチだ。

だから一応は、親が事故死したことにでもしておこう。

「大丈夫、1人で行く」

「却下よ。あんだが1人歩きして町中で倒れたりなんかされても困るもの」

「黒川の言う通りだな。それに日中に中学生が1人出歩いてたら補導されるぞ」

「全くしょうがないわね。私が付き添ってやるわよ」

「花が行くなら私も行くよ。だって霞さんのこと心配だもん」

「なら俺も」

「沢田はダメだな。黒川と笹川は許可する」

「な、なんで!?!」

「さっきのウォーミングアップで霞を除いたドンケツはお前だ。それに全教科において成績最下位のダメツナの話は職員室でも尽きない話題でな。……言いたいことはわかるな?」

「……はい」

お前に授業を休めるほどの成績的余裕はないってか。

ヤバすぎでしょツナさんや。

ていうかなんなのこの人たちは。

優しすぎて禿げるよ。

「えっと、じゃあ、黒川さんと笹川さん、お願いします……」
かくして僕の初・病院行が決定したのだった。

4、検査しました。

静かな病院の待合室。

平日の昼間ということもあってか、人は少なくてちよつとがらんとしている。

体育の先生（後で知ったけど新島匠海という名前らしい）のおかげで学校を休むことのできた僕は、同じくして学校を休んでくれた花ちゃんと京子ちゃんに付き添いをしてもらって並盛中央病院までやってきた。

朝は2人が家まで迎えに来てくれたんだけど、場所を教えた時にものすごく驚かれた。

実は僕の住んでいるところは、並盛では結構高い部類に入るマンションらしく、僕の部屋はその10階（最上階）。

よくこんなところに住めるわね、と花ちゃんに問い詰められたけど、僕はそもそも高級マンションであることすら知らなかったから「お母さんに言われたただだからわかんない」と笑って誤魔化した。

「霞恭華さん、3番の診察室へお入りください」

「あ、はい」

名前を呼ばれたので診察室に向かう。

今回来たのは総合診療科という場所だ。

主に、体のどこが悪いのかわからない、という人向けの科らしくて、今の僕がまさに行くべきところだという。

から、そこに行ってきなさいと保健室の先生に言われた。

中ではいくつか質問を受けて、いつごろから調子が悪いのか、とか、病気にかったことはあるか、とか、とにかく色んなことを聞かれた。

あとは心拍音を聞いたり、血液検査をしたり、レントゲンを撮ったり。

あまりにもたくさんさんの検査をするもんだから、京子ちゃんと花ちゃんがだんだんと不安げな表情になっていった。

僕の体はなんかやばいことにでもなっているのたろうか？

ここまでやることを精密検査ということは知っているけど、僕自身にはそこまでやるような危機感はなかった。

検査がすべて終わると今度は結果待ちということでもまた待合室に戻った。

足をぶらぶらさせたり、不安そうな顔の花ちゃんのほっぺをつついたりして時間を潰した。

「人が心配してるってのに遊ばないでよ」

と怒られたのは割愛。

しばらくするとまた名前を呼ばれたので診察室に向かった。

中に入ると先生が待っていて、パソコンにはたくさんのレントゲン写真が映し出されていた。

おーすごい、レントゲンが漫画で見るようなフィルム写真じゃないぞ。

かがくのちからってすげー！

「まず最初に1つだけ確認させてください。霞さん、あなたは今までに大きな病気にかったり手術を受けたことはないんですよね？」

「ないですよ」

「そうですか。ではこれは生まれつきということですか……」

「あの、結論から言ってどうなんですか？」

しびれを切らしたらしい花ちゃんが問いかけると、先生は、なんというか、気ま

ずそうな顔をした。

「これが生まれつきだとしたら、今まで相当な苦勞をしてきたと思います。検査の結果、霞さんには肺が1つしかないことがわかりました」

「はい？」

「人が生きていくのに大切な呼吸器官です。本来なら左右に1つずつ存在しているのですが、霞さんの場合、それが片方しか存在していませんでした。これでは十分な酸素を得ることが出来ず、生命活動に大きな支障をきたしてしまうのです」

途中から何を言っているのかちんぷんかんぷんだったけど、簡単にまとめるなら「お前よく生きてんな」ってことなんだろう。

おかげでわかったことが2つある。

僕の体は普通では生きていくのがかなり困難であるということ。

そして、お母さんはそんな僕のことをちゃんと守ってくれていたということ。

僕はちゃんと愛されていたんだ。

お母さんは確かに僕のことを愛してくれていたんだ。

普通の人と同じ生活ができない僕に敢えて普通を教えないことで、不自由を感じ

させない日常を与えられていたんだ。

だとしたら僕の死因は、DV Dを見るのに必死になりすぎて徹夜続きになったせいでちゃんと酸素？ まあ栄養の補給ができなかった、ということになるのかな。

うわあ、我ながらとんでもなくダサイ死因だ。

いろんな意味でお母さんに謝り倒したくなってきた。

因みに先生曰く、肺が足りないこと以外は特に異常はなしだと言う。

だから定期的に酸素吸入をするという治療で、それさえ怠ることがなければ普通に生活できるようになるらしい。

「体育の授業ですか？ 言語道断です」

このセリフを言った時の先生の顔は地味に怖かった。

「お2人はご友人ですか？」

「はい」

「霞さんのことを、しっかりサポートしてあげてください」

「はい」

「わかりました」

そして簡易的な酸素吸引装置をもらってから僕たちは病院を後にした。

金額からは目を逸らしたい。

帰り道、僕は装置でシュコシュコやって（ダースベイダーごっこでもしてる気分になったので）ちょっと楽しかった。

すっごいよこれ、めっちゃ体が楽になる。

生まれてこの方一度も味わったことのない快感だよこれ。

「なんか楽しそうねあんた」

「すっごい楽しい！」

今までにないくらいいい気分で返事をしたら2人に苦笑いされた。

「霞、なんか困ったことがあったら頼りなさいよ」

「へ？」

「なんて言うかさ、ここまで知っちゃったし、医者にもああ言われたし、もう他人事じゃないのよね」

「霞さん、ううん、恭華ちゃん。私も花も、恭華ちゃんの力になりたいの」

「そゆこと。ね、どうせ人なんて頼って頼られてなんだから」

「黒川さん、笹川さん……」

「その他人行儀な呼び方も止め。私たちは友達なんだからさ。そうでしょ、恭華？」

「

「え、えっと、そうだね、花ちゃん、京子ちゃん！」

「オッケー」

そう言うのと、花ちゃんは笑顔で僕の頭を乱暴に撫でた。

それに驚いて素っ頓狂な声を出すと、今度は京子ちゃんがクスリと笑った。

「おっし、じゃあこれからあたしの奢りでラ・ナミモリーヌでも行くか」

「えっ花の奢り？ 行くっ」

「それってあの美味しいって話題のケーキ屋さんだね？ 僕も行く」

ラ・ナミモリーヌ。

原作でも京子ちゃんとハルちゃんが出会った場所で、ケーキ好きなら一度は全種制覇したいと考える名店だ。

もちろんケーキ好きは僕だって同じで、ラ・ナミモリーヌは並盛に住んだら必ず

行きたい場所No・1だ。

食べたいものを頭に思い浮かべながら商店街に向かう。

人生初の商店街、人生初のケーキ屋はとても楽しみで仕方がない。

「わぁ、美味しそう！」

お店に入るなり真っ先に京子ちゃんが飛びついた。

一瞬ハルちゃんと見間違えたかと思うほどの速さだった。

花ちゃんを見るとちょっと呆れてる。

きつと京子ちゃんとケーキ屋さんに来るといつもこうなんだろうと簡単に予想がつく。

でも、こんなところも含めて京子ちゃんらしいと思った。

「恭華も選んできな。ちょっと京子、2個までだからね！」

あれもこれもと目移りしている京子ちゃんを止めに花ちゃんが向かったので、僕もショーケースを覗いてみる。

当たり前だけど、アニメで見るよりもずっと美味しそうだ。

花ちゃんの奢りということが頭から離れず無難にショートケーキとロールケーキをお願いした僕は、未だに決まらない京子ちゃんを待つ間はちょっとだけお店の外

に出ることにした。

今のうちに場所を把握しておきたいという本音もある。

「ねえ君、学生は授業の時間だよ」

いろんなお店の存在に感動していたら、突然後ろから声をかけられた。

凄みのある声に肩がびくりと跳ねてしまう。

僕は、この声を、この口調を知っている。

少なくとも、転入2日目出会っていい人物ではない。

「並中生だよね。サボりかい？」

「ち、違います！ びよっ病院の帰りです！」

声が裏返りそうになったけど不可抗力だ。

だって僕の目の前にいるのは、並盛最凶の風紀委員長である雲雀恭弥なのだから。

あ、そう言えば恭弥と恭華って似てるn嘘ですごめんなさい黙ります。

「それ、証明できる？」

「あ、あの、赤津先生か、新島先生に聞けばきつと……。あつ、領収書ならあります！」

咬み殺されたくない一心で、藁にもすがる思いでさっきの領収書を雲雀さんの前に差し出す。

雲雀さんはそれを受け取ることはせず、チラッと見ただけでまた僕の方を見た。やばい、泣きそう。怖すぎて。

「まあ信じてあげるよ。風紀を乱しているわけでもなさそうだしね」
思わずほんと胸をなでおろす。

「それと」

「ひゃいっ！」

「君の髪、長すぎないかい？ 校則違反にはならないけど切るか縛るかした方がいい。邪魔だよ」

「か、髪？」

言われてみれば僕の髪は他の人に比べたらずっと長いのに縛らずに下ろしてある。

僕自身はなんとも思わなかったけど、確かに周りから見たら邪魔かもしれない。でもせっかく長いんだから切るのは忍びない。

「うーん、わかりました。明日から気をつけます」

どうするべきかと悩んでいると、雲雀さんは何も言わずに立ち去り、やがてケキを買い終わった花ちゃんたちがお店から出てきた。

「恭華ちゃんどうしたの？」

「なんかすごい顔してるけど」

「えっ」

すごい顔ってどんな顔ですか。

顔芸ですか。

「今ね雲雀さんに会ったんだけど、髪が長すぎるから切るか縛るかしろって言われちゃって」

「雲雀って雲雀恭弥!? あんた大丈夫だったの!？」

「サボりかって怒られそうになったんだけど、病院の領収書を見せたら許してくれたよ」

「あ、ああ、そう。あんた運がいいわ」

うん、自分でもそう思う。

「髪型なら近くにいい美容院知ってるよ。行く？」

「ホント京子ちゃん？」

「うん」

「行くっ」

やったあこれで雲雀さんに咬み殺されずに済むぞおい。

明日の学校がちよっと楽しみになってきちゃった。

それに学校に行ったらツナが心配しているだろうからちゃんと謝らないとね。

5、楽しめました。

なかった話を挿入しました。

読む人によってはアンチヘイトに見える場所もあるかと思いますがそんなつもりは毛頭ないです。

あと恭華が世間知らずというかもものすごく自己中してるので注意。

僕が並盛中学校の生徒になってから2週間くらいが経った。

病院からもらったあの酸素のやつ（もう名前を忘れました☆）のおかげで体調は良好。

今日も元気に女子中学生をやってます。

髪については、京子ちゃんお墨付きの美容院で可愛く後ろで三つ編みにしても良かった。

しかも編み込みもしてあるからめっちゃくちゃ可愛い。

自分で再現するのはちょっと大変だけど、美容師さんにやり方を教えてもらって
るから頑張ってる。

あの後、ちゃんとツナにも謝って、気づいたら仲良くなれて、そしたらツナくん
呼びができるようになった。

毎日が楽しくて、ツナと喋ったり京子ちゃんと喋ったり花ちゃんと喋ったりして
たら、まさかのツナと京子ちゃんの友達事案発生。

ちょっとこれはどういうことかな。

ツナと京子ちゃんは持田事件を経由しておかないとヤバいんでね？

とは思いつつも楽しそうに話す2人を見て、どうしてその仲を引き裂けるだろ
うか。

いやできない。

原作だとツナの一方的な片想いみたくなってるけど、絶対に両想いでしょ!?

見るよあのツナのデレデレした顔！

あんなの見せられて「2人はまだ出会う運命ではないので離れてください」と
か言えますか!?

無理でしょ！

むしろ僕が2人の仲に嫉妬してるみたいになるじゃないですか違いますよ！

僕は全力でツナ京推しですよ!!

で、このとんでも事案が今後の展開にどう影響するかが一番の心配事なんですよ。ね。

ほら、ツナって京子ちゃんへの想いが原動力ってことが多いじゃないですか。

ん？ だとしたら仲良くても問題ないか。

んー？

ん、んー？

「はっ、そうだ」

「え、何？」

「みんなでツナくんの家に行けばいいんだ」

「どんな展開!？」

そうだよもう一層の事ツナの家に行っちゃえよ全力で仲良くなっちゃえよセフセフ。

「な、何言ってんの恭華ちゃん!」

「だって僕まだ友達の家に行ったことないんだもん」

「でもなんで俺の家なの!」

「え、じゃあツナくんは京子ちゃんの家とか僕の家に来れるの?」

「……無理、だけど」

ほらね臆病ダメツナ!

君が女の子の家に上がれないことくらい僕にはお見通しなのさ!

まあ、普通に考えたら女の子の家に初めて行くのに嬉々として乗り込んでいったらほぼほぼ変態だけどね。

「ねえねえ京子ちゃんもいいよね!」

「えっ? えっと、沢田くんがいいなら」

「よし決まり!」

花ちゃんは用事があるからってことで僕と京子ちゃんの2人でツナの家にお邪魔することにした。

わーい奈々さんに会えるよみんな大好きママンに会えるよニヤニヤしちゃう。

え、そんなこと言ってる僕の方が変態だって？
処すぞ。

「えっとねー、16時に並中学校門前に集合！あとはツナくんの案内でね」
「待って俺まだ許可してないんだけど！」

「え、ダメ？」

「ごめんね沢田くん、恭華ちゃんが勝手に決めちゃったりして。迷惑だったら断つても大丈夫だよ」

「アレおかしいな、京子ちゃんがオカンに見える」

「ぜっ全然メーワクじゃない！大丈夫だよ！」

京子ちゃんが絡むとチョロいなツナ。

「じゃあ16時ね」

ばいばい、と手を振って帰り支度をする。

いったん家に帰って着替えておかないと、制服のままほっつき歩いてたらいつ風紀委員に捕まるかわかったもんじゃないからね。

そのための集合時間なのさ（キラッ☆）

鞆を持って教室を出ようとしたところで腕をちょいちょいと引かれた。

「ちよっと恭華ちゃん、あんまり沢田くんのこと困らせちゃダメだよ」

「別に困らせてないよ？」

困らせてないよ、うん。

困らせてないよね。

「だって急に家に遊びに行くなんて、絶対困ってるよ」

「大丈夫だよ。きつと京子ちゃんが遊びに来るって喜んでるよ」

「ねえ恭華ちゃん」

「僕に任せといて！」

それじゃあ16時ね、絶対だよ！ って言って僕は急いだ。

僕の家は学校からちよっと遠いから急がないと間に合わなくなっちゃう。

酸素なんちゃら（名前わっかんね☆）のおかげでちよっと走ったくらいじゃ倒れたりしなくなったから急ぐくらいはできる。

かるーくでも走れるってすごいことだよ。

あ、新島先生のいる前で走るとめっちゃ怒られるからバレない範囲でなんだ

けどね。

「ただいまー。ネロいるー？」

「あ、おかえり恭華。どうかしたの？」

家に帰って呼んでみればすぐにネロが出迎えてくれた。

なんだかよくわからないけど最近はお留守番を任されてくれるネロである。

「うんとね、今からツナの家に遊びに行ってくるの」

「あれ、モブになる的な意気込みしてなかったっけ」

「それはそれ、これはこれ。あとお願いがあるの。ネロってなんでも用意できるんだよね？」

「はい？ まあ常識の範囲内ならね」

「じゃあ完全防音の部屋お願い！ あと僕のコレクション！」

「はいいい!!」

「あ、もう着替えて出かけなきゃ。ネロよろしくね！」

「ちよつと恭華 ああっ!!」

制服をポイと脱ぎ捨てて簡単なワンピースと上着を身につけて学校に向かう。

急げ、急げ♪

学校の校門が見えてくると、私服の京子ちゃんが立っているのを見つけた。

京子ちゃんめっちゃ可愛い！

まだこっちに気づいてないよね？

よっしゃ今のうちに激写☆

持っていたデジカメで数枚押さえた。

ふふふ、眼福です。

「きょーこちゃん！」

「恭華ちゃん！」

そして何事も無かったように合流。

え、盗撮？ 犯罪？

知らないね、僕はただ友達の可愛い姿を写真に収めただけさ。

「ツナくん来た？」

「ううん、まだだよ」

まだ来てないのかー。

さすが遅刻魔だねー。

とか思ってたらちようど今16時のチャイムが鳴った。

……ごめん、まだ時間ですらなかったね。

ツナを待つ間が暇だったので京子ちゃんに好きな男子のタイプとか委員会が同じだという持田先輩のこととか質問攻めにしてみた。

結果をまとめてみると、好きなタイプは優しくて面白い人、持田先輩は後輩誰にでも優しくしてくれる面倒見のいい先輩だということ。

因みに持田先輩に恋愛感情は一切持っていないらしい。

よかったねツナ、どう考えても脈アリだよ。

ってそんなことは原作でもわかりきってる事か。

そうして待つこと約20分、ようやくツナが現れた。

大遅刻なんだけど全力ダッシュしてきたみたいだし許しませう。

「遅くなってごめんね。母さんに捕まって……。あ、俺の家はこっちだから！」
わあお、奈々さんに捕まっていたのか。

理由はなんとなく察せるし、これはさすがに仕方ないね。

だって奈々さんだからね。

ツナの案内で歩くこと数分、僕にとってはおなじみの沢田家が見えてきた。

リボクラのみんなー！

生の沢田家ですよー！

めっちゃ普通ですよー！

でもすごいですよー！

「いらっしゃい。ツー君のお友達ね。まあまあ女の子が2人もだなんてツナも隅に置けないわね」

「母さん出てこなくていいって言っただろ!？」

「お邪魔します」

「今日はよろしくお願いします、ツナくんのお母さん！」

「2人とも挨拶とかしなくていいから！」

そんなこと言っただってね、人の家に行ったらその家族に挨拶するのは礼儀でしょ

？

僕の従姉妹とか先生だって毎回お母さんにこんにちわーって言ってたし漫画とか

アニメでもいつもしてるよ。

だから礼儀なんだよきつと。

「飲み物、ジュースしかないけど大丈夫？」

「あ、大丈夫ですよ」

「私も大丈夫です」

リビングに通されて京子ちゃん2人、ちょこんと座る。

わあい、わあい、落ち着かないな、嬉しいな。

「そう言えば恭華ちゃんってすぐ人見知りなのかなって思ってたけど、全然違うんだね」

「どういうことかなツナくん」

「だってほら、転校してきた時の自己紹介とかさ」

うわああ、今となっては半分黒歴史。

「あれは、その、だって知らない人しかいないし、あんなにたくさんの方がいるところに立ったのは初めてだったし……」

「それですぐに友達を作っちゃう恭華ちゃんはすごいよ……」

「ツナくんだって友達たくさんいるじゃん。いつもいろんな人に声をかけてもらえていいなあって思うもん」

「弄られてるだけだからそれ……」

えーでもすごいよほんと。

弄られるってことはそれだけ仲がいいってことでしょ。

「それに京子ちゃんは学校のアイドルだし」

「恭華ちゃんと花が勝手に言ってるだけでしょそれって」

「え、京子ちゃん知らないの？先輩たちの間でも人気なんだよ」

「沢田くん、それって本当？」

「う、うん」

廊下を歩く度にいろんな人にヒソヒソ噂されてたのに気づいてなかったんかい！

さすがは作品内随一の天然系ヒロイン。

この様子だと実はファンクラブが存在してることも知らないんだろうな。

うん、それはちょっと黙っておくでしょう。

奈々さんが出してくれたオレンジジュースをストローでちょびちょび飲んでると視線を感じたのでそっちを見てみると、ツナがじっと僕の方を見ていた。

思わず小首を傾げる。

「どうかした？」

「えっ？ あ、ううん、恭華ちゃんの髪って大変そうだなんて、前から思ってた」

「ただの三つ編みだよ？」

まあ編み込みはしてあるし後ろで縛るから普通のおさげにするよりはずっと時間も手間もかかるけど。

「教えてくれた京子ちゃんに感謝だよお」

「私は何もしてないよ」

いやいや、君が美容院を教えてくださいなかつたら僕は次の日あたりにでも雲雀さんに咬み殺されるとこだったよ。

だから結構感謝してるんですよ。

「というか、男の子でも髪が大変そうとか思うんだね」

「い、いや、なんというか、うちのクラスで縛ってるのって恭華ちゃんくらいだし、

それに髪が長いから」

「ああそっか」

言われてみれば確かに。

あんまり気にしてなかったけど髪が長い人とか縛ってる人とかって少ないよね。原作キャラでもハルちゃんとかアーデルハイトとか、スクアーロ(?)とか、ホント少ない。

なんでREBORNの女の子ってみんな髪が短いんだろう？

天野先生の趣味なのかな。

スクアーロなんてうざったいくらいに長いのに。

よくよく考えたらその中にまじる長髪な上に三つ編みの僕って実は目立ってる!? モブのくせに目立ってる!?

※既にモブではない上にツナや京子と友達な時点でかなり目立ってます。

「そう言えばさ、なんで俺の家に遊びに来ようなんていいだしたの？」

「んーとね、おうちに遊びに行くともっと仲良くなれるっていうでしょ。仲良くなったなら、なかなか言えないことも言いやすくなるかなって思ったの。特にツナく

ん」

「お、俺!？」

「最近のツナくんは言いたいことがあるのに言えないって顔してるよ」

直訳すると、どうせだったらリボーンが来る前に告ってしまえそしてツナ京ルー
トだよっほい、ということなのだ。

ほれほれ、今のうちに告白しておけばパンツ一丁の告白だけは回避できるぞい。

「いっ言えるわけない！言うわけない！」

「恭華ちゃん！困らせちゃダメだよ！」

うわーん京子ママに怒られた。

京子ママが怖いよー。

てか言わないのかよツナさんや。

せっかく京子ちゃんがこんなにも近くにいるっていうのにさ。

ぷんすかだよ僕。

リボーンが来るまで待つしかないだなんて酷いじゃないか。

原作が始まったら僕はツナと京子ちゃんの絡みを見る機会が少なくなる(予定)

なんだから。

「恭華ちゃんってよく何を考えてるかわからなくなるよね」

「何を言うのさツナくん。こんなにも分かりやすく生きてるじゃないか」

「なんかすごく楽しそうだなってことしかわからないよ」

「お母さんに『わかり易すぎて社会で生きていけない』と言わせるほどにわかりやすいというのに!？」

「お母さん特殊すぎない!？」

そんなことはないはず。

だって僕のお母さんはよく笑う人だったし表情がコロコロ変わる人だったしなんだったらハルちゃんよりもわかりやすい人だったよ!？」

そんなお母さんに言われたんだから僕はめっちゃわかりやすい人間のはずなんだよ!？」

「ツー君、そろそろ暗くなるけどお友達は大丈夫なの?」

不意に奈々さんがひょっこり顔を出してそんなことを言ってきた。

「えっ? あ、本当だもうこんな時間!」

外を見れば夕焼けから夜にシフトチェンジしようとしている空が目映る。

時計の針を見てもいい時間だ。

気づいてないだけでもう何時間も経っちゃってたんだね。

引きこもりをしてた頃なんて漫画読んだりDVD見たりしてるだけだったから知らなかったけど、誰かと話してるだけでも時間の経過は早いんだね。

「大変！ お兄ちゃんに暗くなる前に帰るって約束しちゃった！」

「京子ちゃんってお兄ちゃんがいるんだね」

「うん、じゃあ沢田くん、お邪魔しました」

パタパタと帰っていく京子ちゃんを見ながら残っていたジュースを飲み干した。

「よし、僕も帰るか」

別に一人暮らしな僕は帰っても誰かが待ってるわけじゃ……あ、ネロがいた。うーん、お腹空かせて待ってたりするのかなあ。

だとしたら早く帰ってあげないと。

「ツナくん、今日はありがとう。また明日ね」

リビングの外にいた奈々さんにもお礼を言って僕は沢田家を出た。

うーん、この家も見納めかな。

そろそろリボーンが来る時期になるだろうし、そしてたかも来ることないだろう。

しっかりと目に焼き付けておかなきゃ。

あ、写真撮っておこ。

6、やらかしました。

「ねえ、なんでいるの」

ある朝目が覚めると、枕元にネロがいた。

いやむしろネロがいたから目が覚めたんだけどね。

だってさ、寝返りを打った瞬間に「むぎゅ！」なんて聞こえたら誰だって起きるでしょそりゃ。

相変わらずの虚姿なのにやわいんだね、意外と。

「私の安眠がぁ……」

「邪魔されたのはこっちなんだけど」

早く本題に入ってください。

というか用もないのに僕のベッドに潜ってたなんて言ったらそのまま永眠させます。

「あ、うん。前に頼まれてた防音室ができたから教えに来たの」

防音室……？

ああそういえば頼んでたね。

地味に期間が空いちゃってたから忘れかけてたよ。

思ったより時間かかるもんなんだね。

「あと、コレクションだっけ？ そっちも頼まれてたから持ってきたけど、何する気？ 前世からの持ち込みって申請とか大変だったんだから」

「何をするかは見ればわかる」

ネロが大きなダンボール箱を持ってくる。

開けてみれば顔を出したのは全て、サバゲーなんかで使うような超ガチなモデルガンだ。

言っちゃうのも難だけど、これ全部、昔からの愛用品。

確か一つだけシークレットの趣味があったよね。

それがモデルガン、つまりは銃の収集だったってわけ。

引きこもりの女の子がこんな趣味を持ったら誰に何を言われるかわかったもんじゃないし、Amazonで買い集めたこれらをお母さんから隠し通すのがどれだけ大変だったことか。

大量のモデルガンの存在に訝しげな表情をするネロと一緒に新しくできたという部屋に向かう。

念のために部屋の中で大音量をネロに出してもらって防音性を確かめてから中に入った。

「ねえ、まさかとは思ってたんだけど、撃つ気？」

「何を言ってるのさ。そんなつもりがなかったらこんなこと頼んでないよ」
装填完了。

奥に用意されていた的に向けて一発撃ってみる。

そう、これだよ、この感覚、この快感を味わってみたかったんだ。

こんなことが出来るのも隠す相手のいない一人暮らしの特権だね。

うんうん。

かつこよさに魅せられてモデルガンを買えるだけ買い漁ったのはよかったけど1度も撃てない、なんて欲求不満にも程があったからね。

「よし、やりたいことはやったし学校に行こう」

「えっこれだけ!? 私の頑張りがって全部これだけのためなの!？」

「うん、そうだけど」

「私の貴重な睡眠時間があゝ……」

「ふうん、虚も寝るんだね」

「だから虚じゃないっての」

いやいやその姿形で虚じゃないって言われたところで説得力に欠けるよ。
だって仮面つけてるし。

ああ、どっちかって言ったら破面の方がしっくりくるかもね。

「で、学校は？」

「……………あ。行ってきます」

ここ1ヶ月くらいずっと思ってるんだけどさ、体育の時間って鬱だよね。

あんなに楽しみで仕方がなかった体育ができないなんて、自分の体を恨むしかないよね。

なんでよりによって肺がないのさ馬鹿じゃないの。

おかげでちょっとでも走ろうとすると新島先生が一瞬で僕を見つけて般若になるからね。

もはやヤンクミ通り越してバケルノ小学校の先生だよ。

あー……早く家に帰って僕のコレクションたちと思う存分に遊んであげたいなあ。

そんでもって全部の感覚を身体に覚え込ませたいなあ。すっごい楽しそう。

「あ！ ツナくん危ない！」

勢いのついたボールの行く先を見て思わず大きな声を上げるも時すでに遅し。ガコーンと音を立ててあまりにも綺麗な程にツナの顔面に直撃した。うわあすごく痛そう……真っ赤になっちゃってる。

「まったく何やってんだよダメツナ！」

「お前のせいで負けただろ！」

周りの男子たちは口々にツナのことを責め立てる。

よく言うよ、自分たちが狙ったところにボールを打つほどコントロールがないせいで暴走したやつがツナに当たっちゃったってのに。

ごめんなさいくらい言ったらどうなのさ。

その時ちょうど授業終了のチャイムが鳴って、みんなはツナに片付けと掃除を押し付けて帰っていった。

「あれ、恭華ちゃん？」

「手伝うよ。これくらいしかできることないし」

「ありがとう」

そこら辺に転がってるボールを拾い集めてカゴに放り投げてからモップで床を磨く。

実はこれがちよつと楽しい。

調子に乗って、新島先生がいないことを確認してから軽く走りながらモップがけをしていたら、ツナがしきりに周りを気にしていた。

「京子ちゃんならいないよ」

「えっ!？」

「探してたんでしょ？ 委員会に行っちゃったと思うよ。だから今は僕とツナくんしかいませーん」

そう言うのとツナは顔を真っ赤にしながら違う違うと否定した。

初心だあな。

隠さなくなっバレてるのに。

「好きなんですよ、京子ちゃんのこと」

「んなっ!？ な、何言ってるの!？」

僕という異物があつて、異物のせいで2人の距離は大きく変わっていったけど、案外世界は単純に出来ているようで、そんなちっぽけな事じゃツナの京子ちゃんへの恋心は消えたりはしなかった。

だって、僕が知る限りではいつもツナの視線は京子ちゃんに向けられてるんだから。

ただ、やっぱり告白はしてない。

アイドルに見向きなんてされるはずがない、という理由から、せっかく友達になれたのに今の関係を崩すわけにはい、という理由に変わったんじゃないかと僕は推測する。

友達だからこそ告白できないその気持ち、よくわかるよ。

今まで外に出たことのなかった引きこもりだけだね。

「あ、あのさ、恭華ちゃん」

「ん？」

「今日さ、よかったら家に来ない？ 時間があったらでいいんだけど、その、一緒に勉強したいなって、思っ。ほら、今日の授業ってちょっと難しかったでしょ？ だから……」

「うーん……いいよ、わかった。僕も今日のところは少し不安だったしね」

「ありがとう！」

本当はさっき言った通り、早く家に帰ってモデルガンを撃ちまくりたいんだけど、せっかくツナの方から家について誘ってくれたんだし、それにあの防音室なら夜に撃っても問題ないだろうし、だから承諾した。

それにまた奈々さんに会えるし。

「京子ちゃんも誘っとく？」

「さっ誘わなくていいから！」

ちっ。

放課後になったら校門で待っているから、と言われてその時の話は終わった。

授業が全部終わって放課後になり、急いで帰り支度をする。

そう言えばこの前遊びに行った時に知ったんだけど、僕の家とツナの家って同じ方角にあるんだよね。

だからツナの家に遊びに行ってもそのまま真っ直ぐ自分の家に帰れるというところでも利点を発見した。

まあ、僕の家はもっと遠いからなんというかって感じなんだけど。

「恭華、もう帰んの？」

「あ、花ちゃん。うん、ツナくん家においでって誘われたから今から一緒に行くの！」

「そう、それはよかったというか頑張ったわね」

「頑張った？」

「気にしないで。気をつけて行ってくんのよ」

「うん！」

花ちゃんとバイバイしてから教室を出る。

さつきツナが教室をさっさと出ていくのが見えたと、早く行かないと待たせちゃうな。

校門まで行くと待っていたツナと合流して、生徒の出がまだ少ないうちにと2人で歩き出した。

ツナ、何か焦ってる？

「お邪魔します」

「あら恭華ちゃん、いらっしやい」

「こんにちは奈々さん」

奈々さんに挨拶をするとツナの案内で彼の部屋へと向かった。

前回はリビングだった分、初めての男の子の部屋にかなり緊張する。

きゃーツナの部屋だー！

「そう言えばどの教科？」

「えっと、数学なんだけど……」

2人で鞆から教科書を取り出して授業の反復に入った。

とりあえずこの1ヶ月でわかったこと。

僕は真面目に本気で頑張ればそこそこの点数に追いつける人だった。

今までは家庭教師がいたとはいえ、馬鹿でも死にやしないという超絶ゆるゆる精神で取り組んできたから全く身につかなかったただけなのだ。

真面目に授業に取り組んで、京子ちゃんや花ちゃんにみっちりねっちより教えてもらったところ、少しずつ成績は伸びていった。

「沢田とのこの差はなんなのかしら」

そうばやいた花ちゃんの表情が今でも忘れられない。

「ツナくん、またそこ間違ってるよ。移行したら符号は逆になるの」

「えっ？ あれっ？」

「あとね、マイナス同士ってかけ算したらプラスに変わっちゃうの」

「あれっ??」

世界中のリボクラのみなさん、ツナの飲み込みの悪さはびっくりぼんですよ。ちよつとどころかかなり骨折しそうですよ。

「ツー君、ちよつといい？」

と、そこに奈々さん登場。

手には何やらチラシのようなものを持っているご様子。

……あれ？

これってヤバげはフラグ立っちゃってませんか？

奈々さんが持ってきた話は案の定、ツナに家庭教師をつけるという内容だった。読み上げてくれたチラシの内容もそれはもうバツチリ。

これは本当にまずいぞ。

「チャオっす」

逃げる間もなく突然聞こえてきた声に3人でびっくりとした。

振り向いたそこにあるのは紛れもなく間違いないリボーンの姿。

リボーンはじつとツナのことを見上げていた。

「お前がツナだな」

「なんだ、こいつ……」

「俺は今日からお前の家庭教師を務めることになった、リボンだ」

その瞬間、ツナと奈々さんはお腹を抱えて笑いだした。

僕ですか？ 笑ってる場合なんてあるわけない。

とにかくその爆笑はリボンにとってかなり不快だったようで、ツナのネクタイを掴んで投げ飛ばしてしまった。

その光景に思わず奈々さんも呆然。

「僕、冷やしたタオル持ってきます……」

巻き込まれ確定なこの状況で、かくして僕はなんとか一旦部屋から退出することに成功するのだった。

7、だめでした。

太陽が仕事を終えて眠りについてからしばらくして、ようやくツナが目を覚ました。

不本意ながらも僕の隣にはリボーンが座っている。

とにかく今は知らんぷりだ。

「ツナくん大丈夫？ 痛いところとかない？」

「えっ？ あ、大丈夫だよ。ごめんね、もうこんな時間なのにくれたんだ」

「気にしなくていいよ。それより……」

知らんぷり、と言えども彼にとってはそうもいかないだろう。

僕はちらりと横を見た。

その視線を追ってしまったツナは、あからさまにギョツとした顔になった。

「何でまだいるんだよ!？」

「俺はお前の家庭教師だからな」

「はあ!？ たかが赤ん坊だろ!？」

今にも飛びかかりそうな勢いのツナのことを袖を掴んで引き止める。

「あんまり刺激しちゃダメだよ。ツナくん、さっきこの子に気絶させられちゃったから」

その言葉が効いたのか、一瞬で大人しくなった。

本当のことを言えば、僕はあの時の時点ですぐにでも沢田家を飛び出して自宅に駆け戻りたかった。

だけれども、奈々さんに少し困ったような笑顔でお願いされてしまったのだ。

ツナが目覚めますまでの間でいいからそばにいて欲しい、と。

あんな風にお願ひされたら断れませんかあっ!!

「とりあえずツナくんは大丈夫みたいだし、僕は帰るね」

あらかじめまともておいた荷物を持って立ち上がる。

「じゃあツナくん、また明日ね」

軽く手を振ってから家を出た。

そこからはもう全力疾走だった。

倒れない程度の全力はもう把握していたからその範囲内での猛ダッシュで沢田家

から自宅までを駆け抜けた。

ここまで慌てて逃げ帰る奴は普通に考えたら不自然極まりないけど、どうせリボーンはツナの相手をして気づかないだろうからとにかく全力で逃げ帰った。

何が何でもリボーンと関わる訳にはいかない。

たとえ原作に関わろうとリボーンにだけは関わってはいけない。

その瞬間に僕の人生は幕を下ろす。

そんな気がした。

「ただいま」

こうなれば気が済むまで本気で撃ちまくってやる。

「京子ちゃんおはよー」

「あつ、おはよう恭華ちゃん！」

結局のところ久しぶりの完徹をキメた僕は、それでも徹夜を全く感じさせない睡眠不足を感じることすらない絶好調とも言える気分の中で登校した。

しかも途中で京子ちゃんとエンカウトすると言う奇跡まで起きた。

ただ……なんだろうな、何か変な感じがするんだよな。

よく思い出せないんだけど、何か大切なことを忘れているような気がする。すぐくもやもやする。

うーん、もしかして寝てないせいで頭が働いてないのかな。

「ねえ京子ちゃん、今日って何か忘れちゃいけないものってあったっけ？」

「え？ うーん……体育の授業はないし、調理実習はもっと先だし、小テストもないし。……何も無いよ？」

「ん、そっか」

だとしたら一体何を忘れているんだろうか。

「あれっ？」

「どうしたの？」

「何か聞こえてこない？」

京子ちゃんに言われて耳を澄ませてみる。

本当だ、何か聞こえる。

なんだろう……地鳴りみたいに聞こえるけど……？

ううん、違う、そんなんじゃない。

「恭華ちゃん、あれ」

同時にその正体に気づいて振り返った。

目の前に広がる光景に、ようやく僕は思い出した。

思い出して、絶望した。

取り返しのつかないことだと気づいた時にはもうすべてが手遅れだったんだと初めて思い知らされた。

その後何があったのかは覚えてない。

目の前の恐怖から逃げ出したいと、ただそう思っていたことだけは覚えてる。

悲しそうに僕を見つめる、ツナの顔も。

「……か、恭華！」

気づいた時には花ちゃんの顔が目の前にあった。

「あんた大丈夫？ 京子もさ、朝から災難だったね」

「朝……？」

何のことだかわからなくて小首を傾げる。

隣を見ると半ば放心状態の京子ちゃんの姿があった。

どうしたの？

問いかけようとして自分の声が出ていないことに気づいた。

自分の体が震えていることに気づいた。

僕に京子ちゃんを慰める資格なんてないと、何故かそう思った。

「今朝、パンツ姿の沢田からの告白事件があったでしょ？ 京子はその時の沢田にショックを受けたみたいよ。いつもと全然様子が違ったものね、アイツ」

ああ、そうだ思い出した。

あの時、校門をくぐろうとした僕たちは異変に気付いて振り向いたんだ。

そして、そこに現れたツナは、僕の予想を、期待を、大きく大きく裏切る形で告白をしたんだ。

「霞恭華、俺と付き合ってください!!」

死ぬ気モードのツナは思っていたものよりもずっと怖くて、好きな人が僕だったという事実には恐怖して、それで僕は拒絶してしまったんだ。

なんて言ったかは覚えてないけど、何かを叫びながら力の限りにツナの胸許を押し返してしまったんだ。

倒れた瞬間に死ぬ気が解けたツナがどんな気持ちだったのかわからない。ただ、とても悲しそうな顔をしていた。

考えることを放棄した僕は、茫然とするツナを置き去りにしてその場を走り去った。

僕はこれから一体どんな顔をしてツナと接していけばいいんだろうか。

ツナが好きだったのは京子ちゃんじゃなくて僕だったのだ。

だけど僕は原作だ原作だと勝手に自分の中で騒ぎ立てて囚われてちゃんと接していかなかったら、なんの迷いもなく躊躇いもなく京子ちゃんが好意の先だと思い込んでいた。

……馬鹿みたいだ。

「あんたは悪くないでしょ」

花ちゃんの柔らかい手が僕の髪を撫でた。

「確かにあんたは思い込みが激しい子な気がするし自分に向けられた感情にすごく鈍感なところあるけどさ、アプローチが中途半端なくせにこんな形で告白してきた沢田もおかしいって」

「ツナくんを悪く言っちゃダメだよ。悪い子は、僕だ」

そう、知識に頼ってばかりで都合主義で現実をちゃんと見ようとしていなかった僕が悪いんだ。

僕が、僕が悪いんだから、ちゃんと、ちゃんとツナに、ちゃんと、謝らなくちゃ。

「ツナくん……」

絞り出した消えそうな声は、それでも彼に届いたようで、静かに顔がこちらに向けられた。

いつも優しい彼は、あの時と同じ、すごく悲しそうな表情をしていた。

言わなきゃ、謝らなくちゃ。

ごめん。

たったその一言が、今はとても高い壁であるかのように思えた。

「恭華！」

「恭華ちゃん……」

結局僕はその一言を口にするかもしれないままに教室を飛び出してしまった。

何も考えないままに廊下をひたすら走る。

怖い。

この世界で生きることが。

この世界の人に関わってしまったことが。

——死ぬ気モードのツナのことが。

本当は京子ちゃんのことを盲目的に好きになるはずのツナが、いるはずのない僕と出会ってしまったから、僕と友達になってしまったから、京子ちゃんが遠い存在でなくなってしまったから、京子ちゃんに恋心を持たなくなってしまった。

それだけじゃない。

死ぬ気モードが怖かった、たったそれだけの理由で僕はせっかく仲良くなってくれたツナのことを拒絶してしまった。

これを機に誰とも関わらずに傍観に徹すればいい。

そう考えてしまえばとても気が楽になるはずなのに、僕の心はとても重く、そしてとても悲しかった。

気づけば屋上までやってきてしまった。

自分の限界もお構い無しに走ってしまったせいで胸が苦しい。

「あ、雲雀さん……」

そして僕の目の前には雲雀さんが立っていた。

何を思ったのか、それとも混乱のしすぎで頭が正常に働いていなかったのか、僕はとっさに雲雀さんの陰に隠れた。

「ねえ、何してるの」

すごく不機嫌なことは声でわかる。

だけど僕は、今ツナと会ってしまいうくらいなら咬み殺されたって構わないと、咬み殺された方がマシだと、そう思えた。

「ごめんなさい、ちょっとだけでいいんです、咬み殺されたって構わないから、今だけは隠れさせてください」

目から溢れ零れ落ちる雫は一体何に向けてのもののだろうか。

走った苦しさか、雲雀さんへの恐怖なのか、それとも――。

しかし雲雀さんは僕の予想に反して何もしてこなかった。

ただ、そこにいてくれた。

「恭華ちゃん！」

しばらくして僕を追ってきたらしいツナが屋上にやって来た。

「ひっ雲雀さん!？」

「騒がしいよ君。僕は今イラついてるんだ、これ以上騒ぐなら咬み殺すよ？」

「失礼しました！」

雲雀さんがいる。

たったそれだけの理由でツナはあっさりと屋上からいなくなってしまった。

雲雀さんの後ろに僕がいることにも気づかずに。

ほっとして僕も屋上から退散しようと思ったその時、視界が大きくぐらりと揺れた。

バランスが取れなくなってしまう。雲雀さんの背中に倒れ込んでしまう。

なんてことをしているんだ僕は。

こんなことをしていたら今度こそ絶対に咬み殺される。

けれど僕の意に反して体は言うことを聞いてくれない。

この感覚を、僕は知っている。

死んだあの日と全く同じ。

僕、また死ぬの……？

そう思ったのも束の間、僕の意識は深く深く沈んでいった。

8、好きでした。

前にあった話を消して全く別の展開にして行きました。
今回は長いというか文字が密集してます。

霞恭華。

それは俺が人生で2番目に好きになった人の名前だ。

モデルのように美人というわけでもアイドルのように可愛いというわけでもないけれど、普通の人とは違う浮世離れした雰囲気を持っていた。

そんな彼女と出会ったのは中学生になって少し経ってから、確かGWが明けてすぐの頃。

俺のクラスに転校してきたのが恭華ちゃんだった。

勉強ができなくて、運動ができなくて、本人には悪いけど俺みたいな人なんだなって思ったのが第一印象。

その日の授業で倒れるまでは。

実は朝っぱらからぶつかってしまおうという事態を起こしていた俺は、その時から体調が悪そうに見えた恭華ちゃんが倒れたと聞いて、びっくりして保健室に向かった。

そこには学校のアイドルの、というか俺が一方的に片想いを募らせているクラスメイトである京子ちゃんがいた。

京子ちゃんは恭華ちゃんの隣の席で、今日は一日ずっと話をしていたらしい。

まさかこんなタイミングで手の届かない存在であるはずの京子ちゃんと話が出る機会ができるとは思わなかった。

その日を境に、俺は恭華ちゃんを通して京子ちゃんと話す機会がぐんと増えて、ほぼ毎日のように好きなこと話せるなんて思ってもみなくて、それどころか友達になってくれるほどの仲になって、とにかく嬉しくて仕方がなかった。

こんなことを言うのはおかしいかもしれないけど、恭華ちゃんが転校してきてくれてよかったって思ってる。

だってそのおかげでこんなにも京子ちゃんと仲良くなることができたんだから。

恭華ちゃんのおかげで京子ちゃんと話す機会ができて、恭華ちゃんのおかげで京子ちゃんと友達になれて、恭華ちゃんのおかげで京子ちゃんの笑顔を今まで以上に近くで見れるようになって、恭華ちゃんのおかげで――。

気づいた時には恭華ちゃんのことを目で追いかけるようになっていた。

毎日のように京子ちゃんのことばかり考えていたはずなのに、気づけば恭華ちゃんのことばかり考えるようになっていた。

そんな恭華ちゃんから家に遊びに、なんて話をされた時には本当にどうしようかと思った。

仲良しになりたいから家に来たいというのは分からなくもないけど、一応俺だって男だし！

迷惑ってわけじゃないけど、俺だって今まで1度も友達が遊びに来たことなんてないのに、ましてや好きな子に言われたらそりゃ戸惑うから！

って言っても恭華ちゃんは並中に転校してくるまでは1度も外に出たことのない生活をしていたらしくて相当な世間知らずなところがあるみたいだし、恭華ちゃんも京子ちゃんもせっかく来てくれるって言うてるんだから断ることもできなかつ

た。

だってもっと2人のいろんなところが見られるんじゃないかって期待しちゃってたから。

あの時の2人の私服とかすごく可愛かったなあ。

京子ちゃんにお兄さんがいることや恭華ちゃんが一人暮らしで頑張ってることもんかも知ることができたし、断らなくてよかったって思ってる。

ただ、その日の行動から見て、恭華ちゃんは何か勘違いをしているような気がした。

ある日、ほんの偶然から恭華ちゃんと2人きりになってしまった。

今までに何回も2人で話をしたことはあっても、完全に2人きりになったのはこの時が初めてだった。

緊張と、誰かに見られてないかという不安から辺りを見回していたら、恭華ちゃんからとんでもないことを言われた。

「京子ちゃんならいないよ」

その言葉に驚いていたら、さらに爆弾発言が飛び出してきた。

「好きなんでしょ、京子ちゃんのこと」

やっぱりこの人勘違いしてるー!?

確かにちょっと前までは京子ちゃんのことですごく好きだったし、今でも学校のアイドルとか友達とかそういう意味では大好きだけど、そうじゃない。

好きな人にこんな勘違いをされていることがこんなにも心に堪えることだとは思わなかったけど、それでも俺は恭華ちゃんに告白しようと思ったことは無かった。

今のやり取りでだいぶ確信したけど、めっちゃくちゃ恋愛に鈍い恭華ちゃんに告白なんかして、それで嫌われでもしたら不登校になる自信がある。

「あ、あのさ、恭華ちゃん。今日さ、よかったら家に来ない?」

だったら友達の間まで仲良くしていききたいと思って、勉強を口実に思いきって家に誘ってみた。

恭華ちゃんは2つ返事でオーケーをしてくれて、未だに勘違いに積極的な会話を振り払うように矢継ぎ早に放課後の約束を取り付けた。

向こうが俺のことをなんとも思っていないとしても、家に来るのが2度目だか

らだとしても、来てくれると言ってくれたのは凄く嬉しい。

ただ、それを誰かに見られたりしたら嫌だし恥ずかしいしでまだ人の少ない早めのタイミングで帰ることにした。

もちろん教室から一緒に行こうというのかなり恥ずかしいから校門で合流ということにして。

転校当初は俺よりも成績のやばかった恭華ちゃんは、たった1ヶ月で平均付近に追いつけるようになるまで点数を伸ばした。

口実とは言ってもそんな恭華ちゃんと勉強することにも意味があるように思えた。

まあ、だいぶ俺のダメっぷりが露呈しただけなんだけどね。

そんな時、あいつが来た。

黒いスーツにおしゃぶりをつけた赤ん坊。

家庭教師だなんて言い出すなら笑い転げていたら、そこから記憶が途切れた。

次に目を覚ました時にはそばで恭華ちゃんが心配そうに俺の看病をしてくれていた。

「ツナくん大丈夫？ 痛いところとかない？」

「えっ？ あ、大丈夫だよ」

ちらりと時計を見ればとくに外は暗くなってる時間だ。

だというのに恭華ちゃんはここにいてくれた。

「ごめんね、もうこんな時間なのについてくれたんだ」

「気にしないでいいよ。それより……」

いつもの感情が読み取りづらい表情のまま淡々と告げる。

恭華ちゃんが俺じゃない方を見たからその視線の先を追いかけると、そこには

さっきの赤ん坊が何食わぬ顔で座っていた。

「何でまだいるんだよ!？」

「俺はお前の家庭教師だからな」

赤ん坊のくせに何言ってるんだよ！

掴みかかろうとしたところで恭華ちゃんに袖を引かれた。

「あんまり刺激しちゃダメだよ。ツナくん、さっきこの子に気絶させられちゃったから」

珍しく淡々としていないその表情は不安と恐怖でいっぱいになっていた。

同時に俺はさっきこの赤ん坊を馬鹿にした直後に投げ飛ばされたということを思い出して、ヤバイと思って手を引っ込めた。

「とりあえずツナくんは大丈夫みたいだし、僕は帰るね」

話によれば、恭華ちゃんは母さんに頼まれて、俺が目覚めますまでずっとそばにいてくれたらしい。

ものすごく申し訳なくなった。

どこか顔色の悪い恭華ちゃんを見送って、部屋に残ったのは俺と、リボンと名乗る赤ん坊だけになってしまった。

死ぬほど気まずい。

「お前、あいつに惚れてるな」

「はあっ!？」

不意打ちに等しい爆弾発言に思わず声が裏返った。

「凶星か」

「だったらなんだよ」

「告白はしたのか？」

「するわけないだろ。恭華ちゃんは大切な友達なんだぞ」

「理由になってねーな」

「赤ん坊のお前にはわかんないよ」

なんで好きなことがバレたのかはさておいて、赤ん坊であるこいつに言われたくない。

俺だって悩んだ末に今の結論に至ってるんだから。

「情けねー奴だな」

「ほっとけ」

俺は何も間違っていない。

と、ぐるぐるるる、なんて音が聞こえて何かと思えば、リボーンの腹が鳴った音だった。

そしてメシの時間だとかって言って部屋から出ていった。

やっといなくなってくれた安心と、変な奴に目をつけられたという不安からお腹が痛くなってご飯も食わずに布団に潜り込んだ。

ろくに眠れないまま翌日を迎え、寝不足もいいところだけど逆に遅刻しないで済みそうな時間に家を出ることが出来た。

「で、今日は告白するのか？」

「うわっ!? ってまたお前か! しないって言ってるだろ。恭華ちゃんに告白したところで無駄だってわかってるんだからさ、告白してお互いに嫌な思いするくらいなら死んだ方がマシっていうか」

「そうか。じゃあ死ね」

「え？」

一瞬、何が起きたのかわからなかった。

頭を撃ち抜かれたのだと気づいた時、俺は心の底から後悔した。

ああ、これでもうこの世ともお別れなんだ。

もう恭華ちゃんと会うこともできないんだ。

こんなことになるなら死ぬ気で告白しておけばよかった。

死ぬ気で――。

「復活^{リ・ボーン}! 死ぬ気で霞恭華に告白する!」

その時、不思議と力が湧いてきた。

今ならなんだってできると思った。

だから俺は全速力で朝の並盛を駆け出した。

大好きな人に想いを伝えるために。

途中で人にぶつかったりトラックに撥ねられたりしたけどそんなこともお構いなしに走り続けていると、ちょうど校門をくぐろうとしている目当ての人物を発見してその目の前で急停止した。

そして俺は大声で叫んだのだ。

「霞恭華、俺と付き合ってください!!」

一瞬の間。

そして

「いやあっ!」

俺は拒絶された。

きつと渾身の力だったんだろう、めいっばいに押し返された俺は後ろに倒れ、途中で正気に戻った。

目に映るのは恐怖だけを感じている恭華ちゃんの顔。

正氣に戻ったおかげで気づいたけど、俺は何故かパンツだけの姿をできてまさしく変態さながら。

泣きながら校舎内に駆け込んでいった恭華ちゃんを見て、何をしてしまったのかをはっきりと理解した。

「なんてことしてくれたんだよ！」

タイミングを見計らったかのように目の前に現れたリボンに向かって全力で怒鳴る。

「告白するつもりなんてなかったって言ったろ！」

「したくてもできなかったただけだろ」

「うるさい！ 最悪だ……泣かせちゃったし、絶対に嫌われた。せつかくできた友達だったのに！ お前のせいだぞ！」

ありえない、中学に入ってやっとできた友達をこんな形で失うことになるなんて本当にありえない。

隣には京子ちゃんもいたし、きつと京子ちゃんにも嫌われただろうな。

これで俺の人生終わりだ、本当に死にたい。

「……ん？ そう言えば俺、撃たれたんじゃ……」

頭に手を当ててみればどこからも血は出てないしそれどころか怪我すらしてない。

「お前に撃ったのは死ぬ気弾だ。一度死んでから後悔した内容で生き返る。今回の場合は告白だな」

「はぁ!？」

あまりにも意味がわからない発言に色々と突っ込みたいところがあつたけど、ちょうどなったチャイムのせいで遅刻の可能性が頭をよぎって全部うやむやになった。とにかく、本当は気まずくて仕方が無いけど、恭華ちゃんに謝らなくちゃ。

……まさかとは思ったけど、教室につく頃にはさっきのことで話題になっていて俺の姿を見た途端に誰もが騒ぎ出した。

冗談抜きに恥ずかしさで死にそうだ。

恭華ちゃんを探せば席に着いていて、ただ、放心しているようだった。

ちらりとこっちを見た黒川がすごく怖い。

京子ちゃんも同じく心ここに在らずといった感じで、俺は完全に何も言えなくなってしまった。

謝らなくちゃいけないって頭ではわかってるのに、声が出なかった。

全部諦めて席に着くことにした。

このまま過ごせば昔の日常に、友達が一人もないダメツナ時代に戻るだろう。なんだ、結局俺はこっちがお似合いなんだ。

「ツナくん……」

不意に聞こえたのは、とても聞き覚えのある声だった。

か弱く絞り出されたせいで消えてしまいそうな、けれど透き通っていてはつきりと耳に届くあの声。

恭華ちゃんが、俺を呼んでいた。

どんな気持ちになればいいのかわからなかった。

また名前を呼んでくれたことに喜べばいいのか、諦めようとした矢先に呼ばれたことに悲しめばいいのか。

とにかく頭の中がぐちゃぐちゃだった。

けれど、恭華ちゃんはそれ以上何かを言うわけでもなく、教室を飛び出してしまった。

俺はただそれを茫然と見ていた。

「沢田！」

突然叫ばれて肩が跳ねる。

「恭華のこと追っかけなさい。今あの子と話ができるのはアンタだけなのよ」

怒りながら言われたその言葉は、黒川が与えてくれた最後のチャンスのような気がした。

教室を飛び出す。

ただ運動音痴な俺と違って根本的に運動のできない恭華ちゃんを見つけること自体はそんなに難しい事じゃなかった。

思ったより足の速い恭華ちゃんを追いかけて向かったのは、屋上。

だけど、扉を開けたその先に立っていたのは、恭華ちゃんではなかった。

「騒がしいよ君」

並盛中学校風紀委員長の雲雀恭弥。

「僕は今イラついてるんだ、これ以上騒ぐなら咬み殺すよ？」

恐怖でゾクツとした。

機嫌を損ねようものなら問答無用で咬み殺される、命がいくつあっても足りないめちやくちやバイ人。

まさかそんな人とはったり出くわすなんて思ってもいなかった。

「失礼しました！」

こんな所に恭華ちゃんがいるわけない。

慌てて屋上から走り去った。

その後いくら探しても恭華ちゃんを見つかる事は出来なかった。

授業にも出席してなくて、騒ぎを知らないらしい先生はみんな首を傾げていたけど、クラスの人たちはみんな俺のせいだと言わんばかりの視線を向けてきていた。嫌なことというのは気分が最悪な時こそ次々と舞い込んでくるもので、昼休みになると剣道部を名乗る人たちが突然現れて、無理矢理に連行された。

ついた場所は武道場で、そこでは京子ちゃんと委員会が同じだという持田先輩が待っていた。

嫌な予感がしたのも束の間、持田先輩から1体1の勝負を申し込まれた。

理由はとても簡単で、京子ちゃんを泣かせたから。

持田先輩と京子ちゃんが付き合ってるって噂は常々聞いていたし、京子ちゃんのこと傷つけてしまったのは事実だから現状に納得はいつていたけど、だからといって勝負を受ける気はなかった。

だって、勝てるわけがない。

相手は全国大会への出場経験のある剣道部主将なんだ、どこに勝ち目がある。

逃げ出そうとして振り返ると、いつの間にかクラスの人たちや先輩たちが様子を见ようと野次目的にゾロゾロと集まってきた。

ヤバイ、無理だ、絶対に逃げなきゃ。

集まった人たちの中に京子ちゃんがいるのが見えただけど、だったらなおさら負けるかわかりきっている勝負なんて受けたくない。

よし逃げよう、心に決めて方向転換した、その時。

頭を撃ち抜かれた感覚。

あ、死ぬんだ、咄嗟に悟った。

それと同時に心の底から後悔した。

何もしないで死ぬくらいなら、持田先輩との勝負から逃げなければよかった。

死ぬ気になれば俺だって先輩に勝てたかもしれないのに。

死ぬ気になれば――。

「復活！^{リ・ボーン}死ぬ気で勝つ！」

不思議と力が湧いてきた。

今の俺ならなんだってできると自信ができた。

正気に戻った時には目の前に持田先輩が倒れていて、俺は周りのみんなから賞賛の声をかけられていた。

俺が、先輩を倒したの……？

「沢田くん！」

「へ？」

俺のことを呼んだのは京子ちゃんだった。

「沢田くんってすごいんだね、見直しちゃった！あと、今朝はごめんね？私も恭華ちゃんも、よく笑いどころがわかってないって花に言われるの」

って、今朝の告白のこと冗談だと思われてるー!?

……まあ、今はその方がいいか。

「ねえ沢田くん、私もツナくんって呼んでもいいかな」

「え、それって……」

「これからよろしくね、ツナくん」

「う、うん！」

よかった、京子ちゃんは嫌いになんかなくてよかった。

それだけでもすごく救われた気分だ。

……でも、いくら見回しても恭華ちゃんの姿を見つけることはできなかった。

京子ちゃんも黒川も、あれ以来見てないっていうし。

ふと、最後に見た恭華ちゃんが今までにないくらいの早さで走っていたことを思い出した。

もしかして、どこかで倒れてる!?

「ごめん、俺、恭華ちゃんのこと探してくる！」

京子ちゃんから聞いたことがあったけど、恭華ちゃんは肺が片方しかないせいで

激しい運動が禁止されているらしい。

だから体育の時間は必ず休んでいる。

それなのにあんなに走ったりして大丈夫なはずがない。

早く見つけてあげないと大変なことになってしまう気がした。

教室にはいない、廊下にもいない、他の学年の階にも、屋上はおろか保健室にさえも。

けど、保健室にいた先生が呆れたように言ったセリフが答えを教えてくれた。

「霞さんなら保護者の方が迎えに来て早退したよ。赤津先生から聞いてないの？」

午前中は保健室にいたらしい。

けど誰からの連絡か、保護者を名乗る人が現れて一緒に帰ったというのだ。

「えっ？ 恭華ちゃんって一人暮らしのはずじゃ……」

俺の中に言いようのない不安が広がった。

9、知りました。

目を覚ました僕が最初に見たのは、何の変哲もない、部屋の天井だった。屋上ではなく、かと言って保健室でもなく。

ここは、僕の部屋だ。

「起きたか恭華」

数回まばたきを繰り返していると、視界にネロの姿が舞い込んできた。

「ネロ……?」

「驚いたよ。あんたの家で寛いでたら突然電話がかかってくるもんで何かと思って出てみたら、相手はあの雲雀恭弥だし、あんたが倒れてから起きる気配がないって言われるしでさ。どんな無茶したら2回目の死を迎えかけるわけ?」

雲雀恭弥……って、え、それマジですか。

それってつまりあの後雲雀さんに世話かけたってことなんだよね。
待って何それ怖い。

「ねえ、今って何時?」

「お昼の12時過ぎ。ただし、あんたが倒れた2日後のね」

「……え？」

ふ、2日後!?

じゃあ僕は丸2日も寝ていたってこと!?

……そうだ、僕は逃げていたんだ。

ツナのことが怖くなっちゃって、顔も合わせられなくなっちゃって。

謝りもしないで逃げ出したんだ。

「……ネロ、聞きたいことがあるんだけど」

「沢田綱吉のことでしょ」

驚いた。

確かにツナのことを聞こうとしていたけど、こうもあっさり当てられるとは。

「ま、言ってなかった私も悪いし、ちゃんと教えてあげるよ。その代わり心して聞きなさいよ。あのね恭華、転生してからあの日に至るまでの間、あんたがどんな考えでどう生活してどう行動していようと、沢田綱吉はあんたに告白していたよ」

「どういう、こと？」

「恭華は仲良くなったせいで告白されたって思ってるようだけどそれは間違い。むしろ、告白されるために仲良くなったのかもしれないね。沢田綱吉が霞恭華に告白する、それがこの世界の運命なの。全部、あんたが前の世界で生を受けた時から決まっていたことなんだよ」

「ちよつと待った！ 本当に待って！ 全く意味がわからないんだけど、どうしたってツナは僕に告白していたって？ 前の世界から決まっていたって？ ぜんっぜん理解できないんだけど」

「理解しろとは言わない。ただ知っておいて欲しかったのよ」
冗談じゃない。

そもそもそんな意味のわからない話、寝起きで聞くような事じゃないんだって。頭がパンクしそうっていうかももうパンクしてる。

なにがどうしてこうなった。

「んで、結構気にしてみたいだから言っておくけど、あんたが告白されたから R E B O R N の世界が崩壊する、なんてことは全く持ってありませんので悪しからず。まあ、間違いなく巻き込まれルートだけどね」

「何それ！じゃあ初めからモブなんてできないって知ってたの!？」

「うん。だって教えてたらショック受けてたでしょ」

「今知る方がよっぽどショック！」

どうせだったらツナに告白されるショックを受ける前に教えて欲しかったんですけど。

でも、話が崩壊しないってことはツナと京子ちゃんの問題なく仲良くなることができるってことなんだよね。

それを知って少しは安心したよ。

で、今ってお昼なんだよね。

お昼、お昼かあ……。

今から学校に行けば午後の授業には出られるかも知れないんだけど、まだ心の準備がなあ。

「行けよコミュ障」

「酷い暴言だね!？」

誰がコミュ障だ、誰がっ!!

「はいはい行きますよーっだ」

クローゼットから制服を引っ張り出す。

ああ、髪がボサボサだよ悲しすぎるよ悲劇だよ。

よしまずはお風呂に入ろうそうしよう。

僕の髪のために。

「その君、止まって」

「ひゃいっ！」

支度に30分かけてようやく学校までやってきた僕なのだが、幸か不幸か（いや絶対に不幸だ）、校門を通り抜けようとしたところで雲雀さんに呼び止められた。

え、何で雲雀さんってわかるかって？

目の前に立ってるからだよ!!

「あ、えと、その、先日はご迷惑をおかけしました。それと、色々ありがとうございます。ございました!!」

考えるよりも先に頭を下げる。

あれかなあ、もしかしたらここで待ち伏せでもされてたのかなあ。

だとしたら今から咬み殺されるってことかなあ。

ひええ。

まあ、あんなことをしちゃったわけだし当たり前だけどさあ。

「もう学校に来ても平気なの？」

「……へ？」

「もしかして目の前で倒れた小動物のことを気にしていないとでも思ったの？」

思っていました。

とは口が裂けても言えないだろうなあ。

言った瞬間に意識と別れを告げるハメになりそうだし。

でも正直に言ってここまで気にかけてもらえていたとは思わなかったんだよね。

いや絶対に思いませんから。

だって雲雀さんって無慈悲イメージが強いしさ……まさかの思い込み？
それともこの世界での雲雀さんのあり方がそうなのかなあ。

うーん。

「まあいいよ。午後の授業に出るんでしょ、今ならまだ間に合うよ」

「あ、はい！」

何が何だかわからないけど咬み殺されないなら万々歳だよ。

「次に風紀を乱したらその時は見逃さないからね」

背後から聞こえてきた物騒なセリフは聞かなかったことにしよう。

さて、教室まで来てしまったわけだけど、こっわいわあ。

ものすっごく怖いわあ。

「あれ、霞か？」

「ひゃいっ！」

また変な声が出てしまったぞい。

「あ、赤津先生。お久しぶりです」

「軽いな。ずっと休んでたからみんな心配してたぞ。特に笹川とか黒川とか沢田と

か」

「ひえっ」

「奇声多いなあー」

奇声じゃないですうー。

口を尖らせながら教室のドアに手をかける。

よし、行ける行ける。

頑張れ霞恭華。

ガラッ

「……………」

ちよっと待ってくださいねえ？

なんでみんな一斉に静かになるんですかねえ？

やめてくださいよまだお昼休みですよ騒いでいてどうぞ。

「恭華！」

「恭華ちゃん！」

「ぐへっ」

今日だけで何回変な声を出せば気が済むんだ僕は。

「え、えっと、おはよう。花ちゃん、京子ちゃん」

ともあれ僕は速攻で抱きしめに來た花ちゃんと京子ちゃんに挨拶をした。

勢いと不意打ちで後ろに倒れそうになったのを踏ん張った僕を誰か褒めて。

「なに呑気に挨拶してんのよ！ どれだけ心配したと思ってるの！」

「そうだよ。会えなくてすごく寂しかったんだよ？」

天使にこんな悲しそうな顔をさせるなんてそんな不屈き者は誰だ!!

……僕か。

そう言えば僕が休んでる間ってなんて説明されてたんだろうなあ。

まさかの無断欠席だったのかな。

2人には苦笑いで返しながら、目だけで教室の中を確認した。

探していた人は、案外すぐに見つけることが出来た。

ちよっとごめんねって言って2人の間を通過って、彼の元まで歩いていった。

「ツナくん」

「恭華ちゃん……？」

どうしよう、また怖くなってきちゃった。

言葉が詰まりそうだ。

頑張れ、頑張れ。

「ツナくん、あのね」

頑張れ、頑張れ。

「ツナくん……この前はごめんなさいっ！」

深々と頭を下げた。

「恭華ちゃん!? な、なんで謝ってんの!? 謝るのは俺の方なのに!」

「だって、だって僕、ツナくんから逃げたんだもん。転校してきてからずっと仲良くしてくれてたツナくんから逃げちゃった」

「そ、そんなの」

「冗談だって知らなかったんだ、ごめんね!」

「はい!」

最終的対処、京子ちゃんと同じオチ。

いやあだってほら、これなら互いにのちのち笑い草にできるかなって。

僕ってば天才じゃないかな？

ね？ ね？

ちなみにツナは見事なツツコミ顔で何か言ってるけど気にしない。

気にしない、気にしない。

「いやあ仲直りできてよかった」

「へ？」

頭にぽんと手が置かれる。

花ちゃんの手だっていうことはすぐにわかった。

「ここ数日、だいぶ空気がヤバかったのよね。恭華が来ないのは沢田のせいだとかってさ」

え、えー……うん、間違っではない。

どっちかって言うとか全力疾走した自分が一番の原因なんだけどね。

でもまさか死亡回避はしたものの代わりに2日間も昏睡してるなんて誰も思わないじゃん？

走った自分が悪いんだけど。

全力疾走した自分が悪いんだけども！

改めて考えると本当によくもまあ雲雀さんに咬み殺されずに済んだこと。

ハッ、まさか実は気を失った後に咬み殺されてそれが原因で昏睡状態になっていたとか!?

……ないな。だって起きた時に痛いところとかなかったし。

「そう言えば午後の授業ってなんだっけ」

「あんた、確認もしないで来たの!？」

テヘペロ☆

「体育と英語よ」

「……………」

「あ、珍しくわかりやすいほどに落ち込んでる」

「体育のことはいい加減諦めなさい」

あー寝よっかなーふて寝しよっかなー保健室と見せかけて屋上でぼかばかお昼寝しよっかなー。

……あ、ダメだ、屋上は雲雀さんがいる可能性がめちゃくちゃ高いんだ危ない。

じゃあ保健室かなあ。

保健医さん優しいから許してくれるでしょ。

よし決まり。

「なんでだろう、今日の恭華ちゃんすごくわかりやすい」

「奇遇ね、私もよ」

「うん、私も」

何か言われてる？

気にしたら負けなのだよワトソン君。

というわけで保健室へ直行！

「……まさか2時間爆睡をキメるとは思わなかった」

目を覚ました時にはとくに英語の授業も終わった放課後というトラップ。
ついさっきまで丸2日間も寝ていたというのに我ながらすごい睡眠欲だ。
おかげさまで結構頭が痛い。

「さっき笹川さんたちが様子を見に来てたよ」

「ひえっ」

こらあかんわあ。

一体何をしに学校来たんだって感じだね。

ホント何しに来たんだろう。

苦笑気味な先生はさておいて、教室に戻らなくちゃね。

10、事故りました。

教室に戻った僕を出迎えたのは誰もいない教室……ではなく、たった1人で残っているツナだった。

「京子ちゃん達なら、先に帰っちゃったよ」

「そっ、か」

おおかた、花ちゃんが犯人だろう。

あの人も僕と同じで他人くつつけることに全力を出す人だから。

それが僕というのが末だ、なんとも言えない。

「じゃあ帰ろっかツナくん」

「う、うん」

「……今まで通りで大丈夫だよ。今さら変な距離感になるのは僕も嫌いだから」

あまりにもぎこちないツナを見ていられなくて苦笑いで伝えた。

僕もツナも、少しは気まずい気持ちが残ってるのは同じだろう。

だけでもう気にしていたって仕方ないんだ。

「ツナくん、好きなこと教えてよ。テレビでもゲームでも漫画でもさ」

帰り道、僕はそんな話題を持ちかけた。

僕はあまりにもツナのことを知らなすぎると思ったんだ。

原作知識に頼って現実が見えなくなるくらいなら、ちゃんと向き合って原作のことを忘れた方がいいのかもしれない。

そう思ったんだ。

ツナの話はとても面白かった。

漫画やアニメが好きという点では改めて意気投合したし、僕はあまりやらないゲームについてもいろんなことを教えてくれた。

「恭華ちゃんは、どんなことが好き？」

ツナからの問いかけに、僕は少しだけ悩んだ。

僕が一番の趣味である銃コレクトは自分でも普通ではないとわかっている。

こんなことを教えて引かれたりしないだろうか。

悩んで悩んで、遠回りな言い方で伝えることにした。

「西部劇、かな」

「西部劇って、あの銃を撃ち合ったりする映画？」

「うん、まあ映画に限っている訳では無いけど。決闘のシーンがドキドキするんだ。特に早撃ちのところが格好いい」

「あ、わかるかも。背を向けて3歩、そこから振り返って構えて撃つ。どっちの方が早いんだろうってなる」

「そう、それぞれ」

ちよつとずつではあるけどあの日より前の空気が戻り始めていた。

西部劇の良さについて語り合っていた。

……そして事件は起きてしまった。

誰もいない道ということもあって、話の盛り上がった僕たちは決闘シーンの真似事をしようとはしゃぎ出した。

背を向けて、声を合わせて3歩進む。

すぐに振り返って相手を撃ち抜く。

バンツと2人の声が重なって笑い合う……はずだった。

ツナが、地面に倒れて動かなくなった。

「え……ツナ、くん？」

最初は撃たれたふりをしたのかと思っていた。

でも、彼に近づいて、それは違うと知った。

本当に意識を失っていたのだ。

「ツナくん、ねえツナくんってば！ 起きて、ねえ!!」

揺すっても叫んでも目を覚まさない。

どうして？

なんで？

僕たちは軽くふざけあっていただけだ。

ツナが意識を失うようなことは何一つとして行っていない。

パニックに陥っていた。

ただひたすらにツナの名前を呼び続けていた。

「騒がしいぞ。子供はとくに帰宅してる時間だぞ」

不意に聞こえた声に顔を上げる。

黒いスーツに黒いボルサリーノ、黄色のおしゃぶり。

「お前、恭華か」

「お願いリボン！ ツナが、ツナが目を覚まさないの！ お願い！」
とにかく必死だった。

リボンがはつきりと僕を認識していることとか思わずツナを呼び捨てにしていたこととかどうでもよかった。

目の前に現れた人物にすぎることしか頭になかった。

「何があった？」

「わからない、わからないんだ、突然ツナが倒れて」

「とりあえず家に運ぶぞ。手伝え」

3度目の沢田家にお邪魔した僕は、リビングでただ放心していた。

目の前には奈々さんが出してくれたオレンジジュースがあるけど、今は飲む気分

じゃなかった。

ツナが、心配だった。

しばらくして、ツナの様子を確認していたらしいリボーンが2階から降りてきてリビングのテーブルの上に、僕の目の前にやってきた。

「心配すんな。気絶つっても寝てるようなもんだからな」

慰めようとしてくれているのか優しく言われた彼の言葉も、残念ながら僕の心は晴らしてくれない。

どうしてあんなことになったのか、全くわからない。

「少し落ち着いてきたか？ 何があったのか教えろ」

「……ツナくんと、遊んでたんだ。西部劇ってカッコイイよね話から、決闘の真似事をしようって話になって、2人で……」

そう、遊んでいただけだ。

だけどあの時――

「振り返って撃つ真似をしたんだ。そしたら、ツナくんが倒れて」

「撃つ真似？」

「子供がよくやるような……こう手を添えて、バンッて」

パリーンッ！

突然の音に息が止まった。

奈々さんが用意してくれたジュースを入れていたコップが、粉々に砕け散っていた。

オレンジジュースがポタポタと床に零れる。

何が起こったのかわからなくて固まる僕と違って、リボーンはすぐに割れた破片を調べ始めた。

「……銃だ」

ぼそりと呟かれた言葉。

銃……？

「う、嘘だ、だって僕は何も」

「だがお前が撃つ仕草をした瞬間に割れた。ツナもそうだったんだろ」

「ぼく、僕は……」

僕が、僕がやったの……？

僕が、ツナを撃ったの……？

そんな、だって僕は、ただ……。

「お前、確か霞って名字だったな」

「そ、そうだけど……」

「屋号は火炭か？」

言っている意味がわからない。

火炭って何？

屋号って何？

僕の名前は霞恭華だ。

火炭なんて知らない。

「屋号・火炭。幻と言われた手銃使いの一族だ」

手銃使い。

それは歴史を紐解けば戦国時代まで遡ることの出来るとても古くから伝承のある特殊な者達だ。

日本に火縄銃が持ち込まれた直後から現れたとされ、武器を持つことなく銃を扱うことが出来たと言われた。

彼らは火炭を名乗り、決められた一族の中からのみ時折現れた。

そうして姿なき銃を扱える者達は皆、体のどこかを欠損させていたという。

しかしいつの日か争いごととは減り、時代に合わせるかのように手銃使い達は火炭という存在ごとこの世から消えていった。

「ま、諸説あるんだけどな」

リボンから語られた話に僕は何も言えなくなってしまっていた。

自分の家系がどんなものであるかなんて気にしたことは無かったし、興味が無かった。

当たり前だ。

だって、何の変哲もない一般人だと思っていたんだから。

だけど何故か、僕は否定することが出来なかった。

僕は生まれつき片方の肺を失っているし、現に、たった今、僕が指先を向けたコップが砕け散った。

「手銃使いの発現する確率はまちまちで、複数人が同時に存在した時期もあれば、数十年もの間生まれなかった時期もあるらしい。だが確実なのは、手銃使いが住む家はそいつが生きている間は繁栄するということだ」

「住む家は、生きている間は、繁栄……」

まさか、と思いたい。

僕がずっと大切にされてきたのは愛されていたからじゃなくて繁栄のためだった……？

いやまさか、お母さんに限ってそんなこと。

ねえそう言えばどうして僕にはお父さんがいないの？

わからない、どういうことなんだ。

いや待てよ、そもそも僕は転生者だ。

この世界では火炭という手銃使いかもしれないけど、元の世界じゃただの一般人という可能性が高い。

いや絶対にそうだお母さんは僕を愛してくれていた、間違いない。

そう結論づけた。

「そう言えば僕が手銃使いだとして、どうしてツナは無事なの？ 武器を持たないで銃を扱えて、戦争の地に身を置いたってことは、それだけ威力があったってことなんでしょ？」

「おそらくはお前のそれに威力がなかったからだ。さっき割れたコップを調べた時、確かに銃痕があったがそこまで強いもんじゃなかったんだ。割れたのは至近距離だったからだろうな。対してツナの時は話に聞く限りじゃ最低6歩分、2m以上は離れていたはずだ。だからツナは撃たれたという感覚だけがあった……それで気絶するなんて弱いな」

「ひ弱なツナくんに求めないであげて」

とにかく分かったことは、迂闊にこんな遊びができなくなってしまったということだ。

今回はどういわけか銃本来の威力が発揮されることは無かったけど、下手撃って威力を引き出してしまったら本当に人を殺してしまうかもしれない。

「てわけでお前もツナファミリーになるか」

「どんなわけで!？」

「言ったら、手銃使いは幻と言われている上に住んでいる家は繁栄するんだ。ファミリーでも同じ話だぞ」

「下心満載ですね」

「武器を持たないのはつまり証拠を残さないのと同義。そうなるとお前を欲しがる裏の人間は大勢いるんだ。そいつらから守ってやるって言ってるんだ」

「あ、いように誤魔化したね今」

理由はどうかあれリボーンは僕をボンゴレに引き入れたいようだ。

仕方ないかもしれない。

僕の力は言ってしまうと、殺し屋としてトップクラスの可能性を秘めている。マフィアさん含む裏の人たちからしたら喉から手が出るほどに欲しい力だろう。下手したらヴァリアーからもフランの如くお誘いという名の拉致をされるかもしれない。

リボーンの話に乗っかれば少なくともその辺りの危険から遠ざけてもらうことが

出来る。

……こんなことになるなんて聞いてないよ。

まあ別にお誘いを断ろうとしている訳では無いんだ。

今となっては願ったり叶ったりな話なんだからね。

ただ、傍観を目指していた身としては少しばかり遠目に考えてみたかったんだ。

「僕も、ある程度のことに対処できるように注意しておくよ。それを差し引いても、本当にボンゴレの下は安全と言い切れるのかな？」

「もちろんだ。お前って結構、受け入れるの早いんだな」

「はははっ、アニメ漫画大好き人間を舐めちゃいけないよ」

あんまり褒められたことでもないんだけどね。

それはそれ、これはこれ。

「んじゃ、頼んだぞ。将来のツナ嫁」

「え、ちょっと待ってそれ確定なの!？」

11、調べました。

屋号・火炭。

それは伝説や幻とまで言われた手銃使いを唯一この世に産み落とすことの出来る一族であり、僕の生きる血族である。

日曜日。あまりに知らなすぎた自分のルーツを知るために、僕は並盛中央図書館へと足を運んだ。

正直、こんな所に火炭の資料があるとは思えないんだけど、リボーンによれば閲覧禁止区域には裏社会に関するものが置かれていることが多々あるという。

「さらっと言ったけど、閲覧禁止って読んじゃいけないから閲覧禁止なのでは？」

「読む方法なんていくらでもあるだろ」

「マフィアの常識を僕に求めないでくれ……」

肩に乗っているリボーンにツツコミを入れながら広々とした図書館の中を歩いていく。

なんでちゃっかりリボーンがいるのかと言うと、僕が図書館に行ったことがない

から利用方法が分からないと伝えたと、同じく火炭のことが知りたいという彼が使用方を教えるという名目でくっついてきてしまったのだ。

下手に独りで彷徨って終わるよりはずっとマシなので、僕はリボーンの同行を快諾した。

「この先だぞ」

リボーンの誘導にて、あっさり閲覧禁止エリアの入口までやってきてしまった僕は、その閉ざされた扉と侵入者を拒む南京錠を見つめた。

……入れないじゃん。

立入禁止の札も出てるしダメじゃん。

透明マントとか持っていないからこっそり入るのも無理だしね。

うん、透明マントが欲しくなってきた。

「そっちは立ち入り禁止だよ……って、また君か」

「え？」

突然声をかけられたと思えば、“また”？

「あ、雲雀さん。こんにちわ」

声の主はやっぱり雲雀さんだった。

日曜日なのに学ラン姿とは……愛校心強過ぎか、もしくは見回り中とかかな？
それにしても雲雀さんと図書館ってなんか似合わない。

「そうだ、この中に入る方法って知りませんか？」

「馬鹿なの？ 不法侵入でもする気なら咬み殺すよ」

「ひえっ」

どストレートに馬鹿って言われると結構傷つくよ……。

「できれば合法侵入がしたいです。じゃなくて、調べたいものがここにあるかもしれないんです」

「調べたいもの？」

「僕の家系と言いますか……火炭という一族について」

「霞の資料 নয়」

「あ、いえ、その霞ではなく、火の炭って書いて火炭です」

火の炭で火炭、そう伝えたと雲雀さんが少しだけ反応した。

え、もしかして知ってる？

くるっと背を向けたかと思うと、雲雀さんは何食わぬ顔で南京錠を外して扉を開けた。

しかもそのまま中に入っていってしまう。

待つてどうということですかこの状況。

「突っ立ってないでついてきなよ」

「え、でも立入禁止じゃ……」

「合法侵入したいんですよ」

「したいです」

まさかの展開に本音ダダ漏れのままに後ろをついていくことにした。

入れちゃったよ……いいんですか。

「ここは良くない情報が置いてあるからね、人目につかないようにしてあるんだよ」

「へえ……。でもどうして僕のこと入れてくれたんですか？」

「ただの気分だよ。だけど関係の無いものを読もうとしたり、知ったことを悪事に

使うようなら咬み殺す」

めっちゃ怖いし言うこと聞くのでトンファアをしまってくださいお願いします。

雲雀さんの案内で僕は火炭について書かれている本が置いてある棚までやってきた。

そのどれもが古くてかび臭い。

しかもやたらと量が多い!?

戦国時代からいるって言うてたし、もしその頃からの記録があるんだとしたらこの量でもおかしくないだろうけど……。

一番取りやすい位置にあった一冊を手にとって軽くめくってみる。

……な、なんてことだ。

「大変だよりボーン……」

「なにか分かったのか?」

「僕……漢字が難しすぎて何も読めない」

「……」

「後生だからその哀れんだ目をやめておくれよ」

古典なんて勉強したこともないんだからか読めるわけがないだろう。

おバカな中学1年生に何を求めているんだ。

「よく蔵書を読もうと思ったな」

「こんなに難しいなんて聞いてない」

「気づけ」

「無理」

というわけで代わりにリボーンが読んでくれることになった。

僕はというと、比較的最近の本を探し出して、読める範囲で読んでいくことにした。

手に取ったのは、手銃使いについて詳しく且つわかりやすくまるでおとぎ話のようになどめられた本。

手銃使いの歴史から始まっていたけど、大体はリボーンから聞いた通りの話だった。

戦国時代に突然現れたことや武器を持たないでその威力を引き出せること、手銃使いが住む家は繁栄すること……。

そして僕は気になるものを見つけた。

「扱える銃器とその威力……？」

書かれていることによると、手銃使いは多種多様の銃器の威力を引き出すことが可能だという。

ただし手銃使い本人の知識に強く依存し、架空の銃器を生み出すことは出来ない。使用する銃器をよく理解し構えを正しく再現することが出来れば本物と同じ威力を出せるが、できなければその威力は大幅に減少する。

そこまで読んで僕は不意に思い出した。

あの事件があった日、僕はツナに対して銃を向けた。

西部劇で使用されている銃という明確なイメージを持って。

ツナが気絶で済んだのは僕が正しい持ち方をしていなかったから大幅に威力が軽減されたから？

そのあとにコップが割れたのは被害がそれだけで済んだのは、銃という大雑把なイメージと子供遊びの構えをしていたから？

さらに読み進めていくうちに、確信に迫るものを見つけた。

「明治に入ってから火炭は手銃使いの数を減らし、霞と名乗って身を潜めた……。手銃使いが現れる頻度は数十年に一度となり、最近で素質を持った赤子が生まれた

のは……」

書いてある西暦を確認する。

「これ、僕のことだ……」

それは間違いなく僕が生まれた年だ。

慌ててこの本が書かれた年を確認すると、およそ十年前のことだ。

こんな最近まで、ここにある資料は更新されている……。

「恭華、ちょっといいか」

難しい方の資料を読んでいたはずのリボンに呼ばれて本を閉じる。

「どうしたの？」

「気になることが書いてあってな。火炭が霞と名を変えて100年以上経ってから、本家の娘に異端がいたらしいんだ。手銃使いを繁栄の道具と考えるのを極端に嫌っていたらしく、素質を持った一人娘を連れて行方不明になったらしいぞ。素質のある娘の名前は載ってねえが、その異端の名はある」

「……聞いても？」

「霞恭奈、という名前だ」

しばらく、言葉が出なかった。

僕はその名前を知っていた。

いや、知っていたとかそんな次元の話じゃない。

「僕の、お母さんの名前だよ」

生まれてからずっと、僕は家族を母しか知らなかった。

父も祖父母も、いそこであるあの子以外の親戚も、誰一人として親族を知らなかった。

どうして父がいないのか聞いたこともあったけど、母は必ず笑って頭を撫でるだけだった。

事故か病気で死んでしまったのかと思っていたけど、今なら違うとはっきりわかる。

僕に父親がいなかったのは、母が僕を連れて家を出たからなんだ。

「ね、ねえリボン、霞弥奈って人は!？」

「ミナ? いや、どこにもそんな名前は載ってなかったが……誰だ?」

「僕の、いそこ、の、はずなんだけど……従姉妹、だって……」

弥奈ちゃんの名前は載ってない……？

いや、そもそも家から逃げてきたっていうお母さんが霞の人を家にいれるなんてあまりにおかしすぎる話だ。

……じゃあ、僕がずっと仲良くしてきたあの子って、誰？

「調べてやろうか？」

「もし、迷惑じゃなければ」

知ることが出来るなら、知りたい。

弥奈ちゃんは一体何者で、どうして僕と仲良くしてくれていたのか。

出来ることなら知りたい。

「うちに写真があるから、よかったら来る？」

「いいのか？」

「うん。だって本当は関係ないのに調べてくれるんだもん、協力しなくちゃ」

読んでいたものを片付けて、ずっと待っていてくれた雲雀さんにお礼を言ってから僕は図書館をあとにした。

家に着いた時に僕の住まいが高級マンションだと知ったりボーンにツツコミを入

れられたのはもはや気にしない。

「確かこの辺にアルバムが……あ、あった。この子だよ」

本棚から出したアルバムの中から一枚の写真を取り出す。

それは12歳の誕生日の時にお母さんが撮ってくれた写真。

僕はリボンに差し出し、隣に写っている女の子を示した。

僕より歳上であることは確かなんだけど、歳を聞くとびに何故か毎回めっちゃな回答をよこしてくるもんで正確な年齢はわからない。

「僕のお母さんも弥奈ちゃんって呼んでたんだけど、弥奈ちゃんが僕の従姉妹じゃないっていうならお母さんとの関係も謎だし、なによりわざわざ従姉妹として接してきた理由がわからない。だから、また会うことが出来たら……。でも、弥奈ちゃんを探すことをメインにしなくてもいいからね。手が空いて暇な時で構わないから」

矢継ぎ早に言ってしまったが、本心としてはどうしても会いたい。

出来ることならお母さんにだって会いたい。

これは前世での話になってしまいうけど、あんなに泣いたお母さんを見たのは初め

てだったから、悲しませてごめんなさいってちゃんと言いたい。

写真を渡してなにか分かったら連絡するといったリボーンが突然動きを止めた時、正直に言ってリボーンを家に招いたのは失敗だったんじゃないかと思った。

油断してたんだ、きつと。

「火薬の匂い……？」

そうでなければこの一言で思考が止まることは無かった。

「恭華、なんで火薬の匂いがするんだ？」

「ナ、ナンノコトカナー」

「こっちの部屋からするな」

そう言って迷いなく向かったのは、ネロに作らせたあの防音室。

ダメだって、そっちには僕のコレクションが——!!

ガチャッ

止めようにも間に合わず、あっけなくドアは開かれてしまった。

「……恭華」

「弁明のしようもございません」

見られてしまった。

僕の大事な銃コレクシヨンたちを。

よりによってリボーンに。

「うう、そうだよ銃が好きなんだよ集めるのも撃つのも好きなんですよもうっ！」

「まだ何も言ってるねーだろ」

「どうさなんでこんなに銃が置いてあるんだとか言いたいんでしょ全部趣味で集めたモデルガンだよ毎日撃ってるよそこら辺の人より銃について詳しい自信あるよもうっ！」

「だからまだなんにも言ってるねーって」

するとリボーンは壁一面に飾られた銃の中から一つを手を取った。

それは僕のお気に入りうちの一つだ。

「恭華、この名称と特徴を言ってみろ」

「コルト。シングル・アクション・アーミー、通称S.A.A。西部劇で保安官が使用してることも有名で、その事からピースメーカーとも呼ばれる」

一瞬驚いた顔をしたリボーンだが、すぐに違う銃を取った。

「S & W M19・357マグナム弾を装填できることからコンバットマグナムと呼ばれる。ルパン三世でおなじみ次元大介の愛用銃」

「じゃあこっちは」

「グロック17。警察間では世界的に幅広く使われている銃。ちなみに隣に置いてあるのはグロック18。デザイン的には17と大差はないけどフルオートで危険だから僕はまだ撃ったことがないん」

ペラペラと銃知識をおおっぴらに披露していると、さすがのリボンも呆氣に取られていた。

あ、そうそう、さつまきコンバットマグナムの話が出たけど、もちろんワルサーP38もあるよ。

なんでって、好きだからだよ。

ルパンってカッコイイよねー。

次元ってかっこいいよねー。

こうやって構えてさー、ちょっとだけニヒルな笑み浮かべちゃってさー、それでズガンと

ズガンッ！

「……………」

「……………」

いやホントごめんなさい自分のことド忘れしてました銃のこと語りたすぎて忘れてました。

「今の、すごい威力だったねえ……あはは。さすがコンバットマグナム」

「笑ってる場合か。それより威力を引き出せるようになったのか」

「え？ あ、うん。銃を理解してることと正しい構えができることが最大条件らしいんだ。今日読んだやつに書いてあったよ」

あー、ちょっと試してみたいことが出来ちゃった。

的に向けて作る構えはピースメーカー、つまりは西部劇のあれだ。

ツナに撃ってしまったアレがもし本物の威力を持ってきたらどうなっていたのか、確認しておきたかった。

ズガンッ！

……ひえ……。

とりあえずやばかったっていうのはよくわかった。

「お前が銃に詳しくなったのは必然だったのかもな」

「え、やめてよ。銃コレクターってことリボーンしか知らないんだよ。お母さんも弥奈ちゃんにも言っていないんだよ」

ただの偶然だと信じたいよ僕は。

だって銃を好きになったきっかけなんてルパンやリボーンなんだからさ。

方向を間違えてたら日本刀フェチか錬金術マニアにでもなってただろうさ。

なににせよ中二病まっしぐらであることには変わりないんだけどね。

「ところで今日一日付き合わせちゃったけど大丈夫だった？ 一応はツナの家庭教師なんだよね？」

「心配すんな。アイツには俺が帰るまでに終わらせなきゃなんねー課題を置いてったからな」

「えげつない……」

「で、お前またツナのこと呼び捨てになってるぞ」

「げっ」

やっぱいい、リボーンと話してるとどうしても素に戻る。

いや普段がキャラを作ってるって訳では無いんだけどね。

ただやっぱりツナのこととはツナくんと呼びたくなるのさ。

素でいるとどうしても抜けるみたいだけど。

「んじゃ、今度こそ帰るぞ。あとでお前にも課題やつからな」

「いらない……」

どうやら僕も生徒認定されたらしい。

というかファミリーに入った時点でそうなるか……。

……で、課題って何。

12、勉強しました。

さてはて現在、自宅にて山積みのプリントと戦ってます。

これ、一体何かといいますと、リボーンによって課せられた課題なんです。

えーっとほら、前に我が家に来た時に「課題あげるからな」とかなんとか言われたじゃないですか。

まさしくあれの末路です。

さすが一流の家庭教師と言いますか、僕の学力を知ったリボーンから大量の勉強プリントを出されてしまったんです。

しかもこのプリントはツナがやっているものとは内容やら構成やらが全く違うらしい。

ツナは基礎を身につけること、僕はひたすら数をこなすことがそれぞれの学力アップに繋がるということ、わざわざ2人分を作り分けたというのだ。

「……だからって一問一答形式を一教科につき1000問はちょっと頭がおかしいのでは」

一問一答形式、1000問を国数英理社。

それが課せられた課題の量。

ちよっとどころかかなり意味がわからないよ。

国語を100問まで頑張った時点で脳ミソが疲れました。

このプリント地獄への唯一の救済は、教科書をガン見していいことくらいかな……。

「ネロ、代わりに解いて」

「やだよ。人の言葉は読めないんだ」

「なんだって」

こんなところで衝撃の告白はいらないよ。

「それに、読めたとしても代わらないからね。情けは人の為ならず、だっけ」

「諺は言えるんかい」

ネロのことがよくわからなーい。

えーい、こうなったら僕にだって考えがあるんだからね！

いでよ、家電いえでん！

「あ、奈々さんこんにちわー」

『あら恭華ちゃん。どうかしたの?』

「ツナくんとリボーンはいますか?」

『2人ともお部屋で勉強してるわ。恭華ちゃんも来る?』

「行きまーす!」

カバンに荷物を詰め込んで、いざレッツラゴー!

ずるいとか叫んでるネロは無視。

ずるくないもん。

問七の話みたいにな、みんなやれば捗る精神なだけだもん。

だからずるくないもん。

「いってきまーす」

家を出てすぐにツナの家に向かう。

もう何回も行ってるから迷子には絶対にならないのが嬉しくなってきた。

本当なら走っていききたいところなんだけど、そんなことしたらそのへんの道端で屍になってるのがオチだから絶対にやらない。

とても走りたい欲求に駆られているよ僕は。

僕の住むマンションからツナの家までは歩いて15分くらいと地味に遠い。

僕の15分だから普通の人なら10分以内で歩けるとは思うけど。

「こんにちわー」

沢田家のチャイムを鳴らすとすぐに奈々さんが出迎えてくれた。

そのまま2階のツナの部屋に向かうのだが、奈々さんには僕の来訪は内緒にしてもらった。

だってなんかそのほうがドッキリみたいで面白い気がするから。

なんだかこうしていると、リボンと初めて会った日のこと思い出すなあ。

ツナの部屋に上がるのはあの日以来だっけ。

「やっほーツナくん」

「きよっ、恭華ちゃん!？」

ノックもしないで入ってみれば、期待を裏切らないリアクションが返ってきた。

ドッキリ大成功。

「ど、どうしたの？」

「遊びに来たよ、と言いたところなんだけれども、残念ながらお勉強をしに来ました」

突然の事態に頭が追いついていないか硬直しているツナの隣に座って、鞆から大量のプリントを引っ張り出す。

それを見てツナの硬直はどうやら解けたようだ。

「んなーっ!? 何これーっ!?」

「終わらないんだよ。5000問なんて終わるわけがないんだよ」

「5000問!? 何でそんなことしてるの!?!」

「リボーンに課題出されちゃって」

白紙に近いプリントを見てげんなりしてしまう。

本当、僕の家庭教師のお姉さんとは大違いだ。

「1人だとやる気も出なくて終わる気がしないんだ。ツナくんと一緒なら頑張れる気がするし、いいでしょ?」

「うっうん、もちろんだよ! 恭華ちゃんがいてくれると心強いよ」

期待されても、僕だってギブアップしたからここに押しかけちゃってるんだよな

あ。

僕だって根津にいびられる程に酷い点数なんだからね……。

うっ、自分で言っただけは悲しい。

根津にいびられるのだけは嫌だ。

途中途中でリボーンからの文句を受けながらもツナと2人で少しずつプリントを消化していく。

当たり前といえば当たり前なんだけど、一向に減る気がしない。

だというのにリボーンはひたすら急かしてくるもんだから余計に進まない。

ツナ……毎日この重圧の中で暮らしているなんて君はすごいよ尊敬するよ。

僕には無理だ。

「終わる気がしない……」

「右に同じく……」

数時間後、僕らは揃いも揃ってテーブルに突っ伏していた。

お互いなんとか片付いた課題は奇しくも半分に満たないと言うのに、経過チェックとしてプリントを眺めているリボーンからはため息が聞こえてくる。

どっちのプリントを見てこぼしたため息なのかはわからないけど、これは明らかに呆れている。

僕のじゃありませんようにと願うのは悪くないはず。

「まったく、情けねえな。これしか解いてねえのに恭華は5割、ツナに至っては2割しか当たってねえぞ」

5割正解してるんだったら大目に見てほしい。

数ヶ月前までだったなら全間不正解の自信だってあったんだからね。

「ところで恭華。お前の英語なんだが、何個かスゲー間違い方してるぞ」

「スゲー間違い方？」

「イタリア語になってる」

そりゃスゲーや。

なんでそうなったかって？

「なんかイタリア語に見えた」

「イタリア語読めんのか」

「まったく読めない」

「どうしてこうなった」

「面白い言葉は片っ端から弥奈ちゃんが教えてくれた」

「知識偏りすぎだろ」

「うん知ってる」

うん知ってる（2回目）。

だって弥奈ちゃんってば、なんでも知ってるんだもんさ。

ジツリヨネロとかミルフィオーレとかその他のあれやこれやの直訳を教えてくれたのだって弥奈ちゃんだし。

確かに色んなところに旅行に行ってるのかなんとか。

イタリアにも何回か行ってるって言ってたし、羨ましい限りだ。

僕もいつかイタリア旅行してみたいな。

「恭華ちゃん。弥奈ちゃんって誰？」

「あ、ツナくんには話してなかったっけ。僕の従姉でね、面白いことを沢山教えてくれた人だよ。漫画とかアニメとか好きになったのも弥奈ちゃんのおかげなんだ」
「へえ、そんなんだ！」

ほんと、頭もよかったんだよな、弥奈ちゃんは。博識っていうかさ、なんでも知ってる人だった。

おそろくだけど、僕の知識は家庭教師のお姉さんより弥奈ちゃんに教えてもらったことの方がよっぽど多く蓄積されてる。

頭が良くて、それで美人ときた、これは強い！

人生勝ち組ってやつですかね。

弥奈ちゃん、今頃はどこで何をしているんだろうか。

またイタリア旅行にでも行ってるんだろうか。

そもそも、この世界に存在しているんだろうか。

お母さんとも会うことができないであろうこの世界で弥奈ちゃんを探すのは、雲を掴むような話なのかもしれない。

リボーンに無理難題を押し付けてしまったという自覚はある。

だけどそうまでしてでも僕は弥奈ちゃんに会いたくて仕方がないんだよ。

もちろん、できることならばお母さんにだって会いたい。

僕の願いが、この希望がどこまで実現可能なのかわからないけど、生きていけば、

自分が生きてさえいれば大抵の事はなんとかなるってお母さんが教えてくれた。

だから僕は信じてる。

お母さんにも、弥奈ちゃんにもきつと会えるって。

僕はちゃんと、信じてる。

13、爆発しました。

めっちゃお久しぶりです

えー、はい。ついにこの日がやってまいりました。

「転校生の獄寺君だ。仲良くしてやれよ」

「ありゃ、もうそんな日か」

原作にして第2話、つまるところツナの告白劇の次の話なんだけど、個人的に色んなことがありすぎてだいぶ長い時間が過ぎたように感じてる。

でもやっと来たって感じだね。

仲良くなれるといいなあ。

ガタンッ

「うわっ」

ツナの机を蹴り飛ばすのは原作通り、っと。

ネロからは特に何も聞いてないけど、もしかた大きな相違があったらどうしようと気が気じゃない。

獄寺のことを目で追っていたらなんとなく視線を感じた。

ちらっとそっちの方を見てみると、ツナと目が合った。

あ、そういえば原作でも京子ちゃんの反応を気にしてたっけ。

でも僕って無表情というか、感情が読み取りにくいって散々言われてきたからなあ。

「ねえ恭華ちゃん、獄寺くんってかっこいいね」

「うん、そうだね」

京子ちゃんはやはり目をキラキラさせていた。

そういえば男の子をカッコいいとかそういう感じで見たことがあまりなかったよな気がする。

ツナに告白されてもドキドキしないのは、漫画のキャラクターだという認識があるからだとは思っていたけど、今獄寺を目の前にしてもあまりドキドキしてない。転生する前なんかは男子と会話はおろか顔を合わせたことすらないのだから、結

局はその理由が彼らがキャラクターだからなのかはよくわからない。

そんなこんなで時間は過ぎて、気づけば放課後になっていた。

思っていた以上に何事もなく一日が過ぎてしまったものだからとりあえず遠目で獄寺を眺めてみる。

なるほど、かっこいいんだなあ獄寺。

僕にとって“かっこいい”とかはどうしても漫画やアニメのキャラクターにしか適応されないし、獄寺を見てそういう感想が出るのはやはりキャラクターだから？

それにしても転校初日から女子に囲まれる人気っぷりを発揮するのはさすがとしか言えない。

「あっ」

気のせいかな、今……獄寺と目が合っちゃった気がする。

曲がりなりにも殺し屋なわけだし、ずっと見ていたから視線が気に障っちゃったのかも。

あ、こっちに来た。

「おい沢田」

と思つたら僕じゃなくてツナだった。

まあ、そりゃそうですよね。

というよりも未だにツナが教室に残ってるのが驚きだ。

確か原作では獄寺の威圧か何かに怖がつて慌てて教師から逃げ去つてたような記憶だつたんだけど違つたかな？

「ちよつと来い」

「え、あつ、ちよつと!？」

バイバイ、ツナ。

学校の平和のためにも頑張つてね。

……なんて、ついていけないわけがない僕なのである。

表向きの理由を言うなら、そうだな、ただならぬ雰囲気 of 2 人が心配になつて様子を見に行った、かな。

つていうことでこつそりと2人の後をついていくことにした。

向かつた先は校舎裏。

なんというかジメジメして嫌なところだ。

しばらくしてツナと獄寺が何やら話し始めたから、僕は近くの木の陰に隠れた。

「こんなところで何してんだ恭華」

「ひゃうんっ！」

ちよっと誰だよびっくりして変な声が出ちゃったじゃないか。

「って、リボーン」

もうこの殺し屋さん怖い。

「あの2人を追ってきたのか」

「うん、まあね。気になっちゃって」

「ここにいと危ねーぞ。教室に戻れ」

「えー……」

悔しい、実に悔しい。

確かに獄寺のダイナマイトがこっちに飛んでこないとも限らないし、本当にそう
なったりしたら危ないで済む話じゃない。

だからと言って、獄寺がツナに敵意を向けるこの貴重な時間を見逃したくはな

い。

「ねえ、僕の銃でどこまで回避とかできると思う？」

「……お前、その銃口がどこに向いてるのか自分でわかってるのか？」

「いいえ全く」

「論外だな。家から持ってきて出直せ」

「悲しき」

この場に存在しない銃の細かい制御だなんてできるわけがないじゃないかばかー。

「わかったら戻れ。巻き込まれる前にな」

「えー……」

悲しきなり。

やはり僕はただのモブでしかないのか。

ありきたりな2次創作主人公みたい之余裕ぶっこいて観戦することさえも許されないのか。

なんてことだ。

そうは言っても長居すればするほどにリボーンにきつく叱られてしまうかもしれ

ない。

誰に対しても容赦ないリボーンのことだ、僕のことだって蹴るなりなんなりして追い返そうとするだろう。

つまり、大人しく戻るしかないということだ。

トホホ。

がつくりと肩を落として教室に戻った僕を待っていたのは、京子ちゃんと花ちゃん。
ん。

鞆をほっぽり出してなくなった僕のことを探していたらしく、花ちゃんにこつてり怒られた。

めっちゃごめん。

でも、もっと謝らなくちゃいけないのは、僕はまだ帰るつもりはないことだ。せめてツナが戻ってくるのを待ちたい。

「あら、遂に恭華も積極的になったのかしら？」

「そっ、そういう意味ではないから！」

単純に獄寺とあの後どうなったのか気になるだけだから！

「じゃあ私たちは先に帰るわね。2人の邪魔しちゃ悪いし」

「ちょっと花ちゃんってばあ！」

原作での京子ちゃんに対してもそうだったけど、花ちゃんってホントこういうところ意地悪だよねえ。

まあ確かに、少なからずマフィア〜んな会話になるだろうから居てもちよっと困っちゃうけどさ。

ばいばいと手を振ってから数分後、色々な意味でボロボロになったツナと、既に忠犬になった獄寺が戻ってきた。

……にしても爆音とか聞こえなかったような。

「アレ、恭華ちゃん？ まだ残ってたの？ 京子ちゃんたちは？」

「置いてかれちゃった。だからツナくんのこと待ってたんだ」
半分嘘ですけどね。

「本当はツナくんのこと追いかけていきたかったんだけどリボーンにダメだって追い返されちゃって。だから心配してたんだよ」

「んなっ!? ついてこようとしたの!？」

「10代目、こいつは……?」

「しがないモブでクラスメイトですどうも」

ツナが何か叫んで突っ込み入れてた気がするけど気にしない。

「それでさ、仲直りはできたの?」

「え?」

「だって朝からずっと仲が悪いみたいだったし、あれ、さっきのは喧嘩に行ってたんじゃないの?」

我ながらになかなか天然キャラっぽい発言をしたと思う。

ああでも本物の天然京子ちゃんはもっと素っ頓狂なコメントするか。

まあ現状の僕ではこんなものでしょ。

そこまで天然キャラを目指してるわけでもないしね。

「お前、名前は」

「ほえ? 霞恭華だけど」

「霞! 10代目に馴れ馴れしくしてんじゃねえぞ」

……………はい？

え、ごめん、今なんて言った？

僕、なんて言われた？

「な、なに言ってるんの獄寺くん!？」

「いやホント何言ってるのかよくわからない。そもそも僕は君よりもずっと前からツナくんとは友達なんだけどさ……」

「そんなこたあ関係ねえ。10代目は大事なお方だ、10代目をお守りするのが俺の役目だ」

全力で訳が分かりませーん!!

何で僕が敵対視されてるのかも分かりませーん!!

ていうか僕って一応ボンゴレに保護されてる人間なんですけど!?

「あんまり酷いことを言うとおしおきしちゃうぞ」

「はあ？」

「ばんっ」

子供の手遊びレベルの手銃で獄寺の眉間を狙う。

普通の銃を構えるのと違ってこれを使えば人差し指の向く先がつまりは銃口になるから狙いがつけやすい。

「いっ!？」

そして当の本人は突然の痛みに戸惑っているらしかった。

今回の銃はお遊び程度だからBB弾や輪ゴム、とにかく子供遊びの範疇内の威力をイメージしているが、それでもこの至近距離で眉間はそれなりに痛いのだろう。

「てめえ、何しやがった！」

「もういっちょ、ばんっ」

今度は頬を狙う。

ちよっと指ではじく程度の可愛い威力だ。

それでも獄寺にとっては正体不明の衝撃で痛いらしい。

ふーむ、なんだかんだで手銃使いつてのはなかなかのものみたいだね。

「きよっ、恭華ちゃん!? 獄寺くんは何したの!？」

「あれ、ツナくん知らないの? リボンから聞いてない?」

「知らないよ!」

あれま意外だ。

僕が手銃使いだからファミリィに入れる、みたいなことくらいは言ってそうなのにな。

どうしてだろう。

「てんめえ、絶対^{ぜってー}に許さねえ！」

ツナが理解してないとか現状マジヤバ。

「ごめんごめん、ほんの冗談のつもりだったんだよ。ツナくんは知ってるそばかり思ってたし何より君が理不尽に突っかかってくるから……」

「うるせー、果てろ！」

「それに僕、これでもボンゴレの保護下にいる人間だから無闇に攻撃されると後が怖いとか……」

「なっ！」

教室内だというのに僕に投げられたダイナマイトは既に獄寺の制御範囲外にある。

なんていうか、本気でマズイ。

一か八かで撃ってみるしかない。

咄嗟に拳銃の構えを取ろうとした、その時だった。

チインッ

“本物の”弾丸が導線を割いた。

「そこまでだ」

いつ来たのか、窓にリボーンがいた。

「恭華、無闇にその力を使うんじゃない」

「ごめん。煽られたからつい」

「獄寺、恭華に手を出すな」

「で、ですがリボーンさん……」

わー、喧嘩両成敗ってやつですかねこれ。

難しい言葉は知らんけど。

「ねえリボーン、どうしてツナくんは僕のこと言っていなかったの？」

「面倒だったからな」

「いやそこめんどくさがらないで!? ホウレンソウ大事!!」

おかげで死にかけたんですけど!?

「つーわけで紹介しとくな。こいつは霞恭華、幻と言われた手銃使いだ。本人の同意の上で今はボンゴレの保護下にいる」

「んなー!? 恭華ちゃんもマフィアだったのー!?」

「いやいや、違うよツナくん。それは誤解。確かに不思議な力は持つてゐたいけど、それを除けば一般人、僕はあくまで普通の人だよ。ただ、僕の力が裏社会だと危険視されてゐるから、ってリボーンに言われて、僕は自分も守れないからお世話になることにしたの」

ただしこの世界に置いてのマフィアひいては裏社会事情に詳しいことに関しては割愛してほしい。

リボクラは強い。

それを差し引いたって僕は一般人だ。

一般人のハズ。

一般人……だよな？

「で、何すか、その手銃使いつて」

「実体のない銃を扱うことのできる特殊な人間のことだ」

「実は私も最近知ったばかりで、思ったより情報が多いから詳しいことは資料でも読んでね」

図書館で調べたことを基にリボンが火炭の資料を作ったと知った時には驚いたよ。

なんでもボンゴレに報告するために必要だとか何とか。

ついでにこういうときにも役立つだろう、なんて言っではいたけど……早速役に立ったよね。

ありがたや。

渡された資料に、訳が分からんという顔をするツナの一方で、獄寺は真剣に目を通してくれていた。

「つまり霞は、繁栄を目論む奴らから狙われやすいってことですか」

「そうだぞ。それに恭華はそれを差し引いても大事な人材だ、保護対象であると同時にファミリーの一員でもあるんだぞ」

「えっと……今日のことは僕も悪かったし、そういうこともあるから、もう攻撃

とかしないでもらえると嬉しいなって」

「……っち、わあったよ」

ふう、これで何とかなった。

それにしても改めて考えてみると、ファミリー第一号が僕って……いいのかなあ。

恭しき華は霞の中で何想う

著者 音子雀

発行日 2020 年 2 月 25 日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-
<https://syosetu.org/novel/27333/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。
